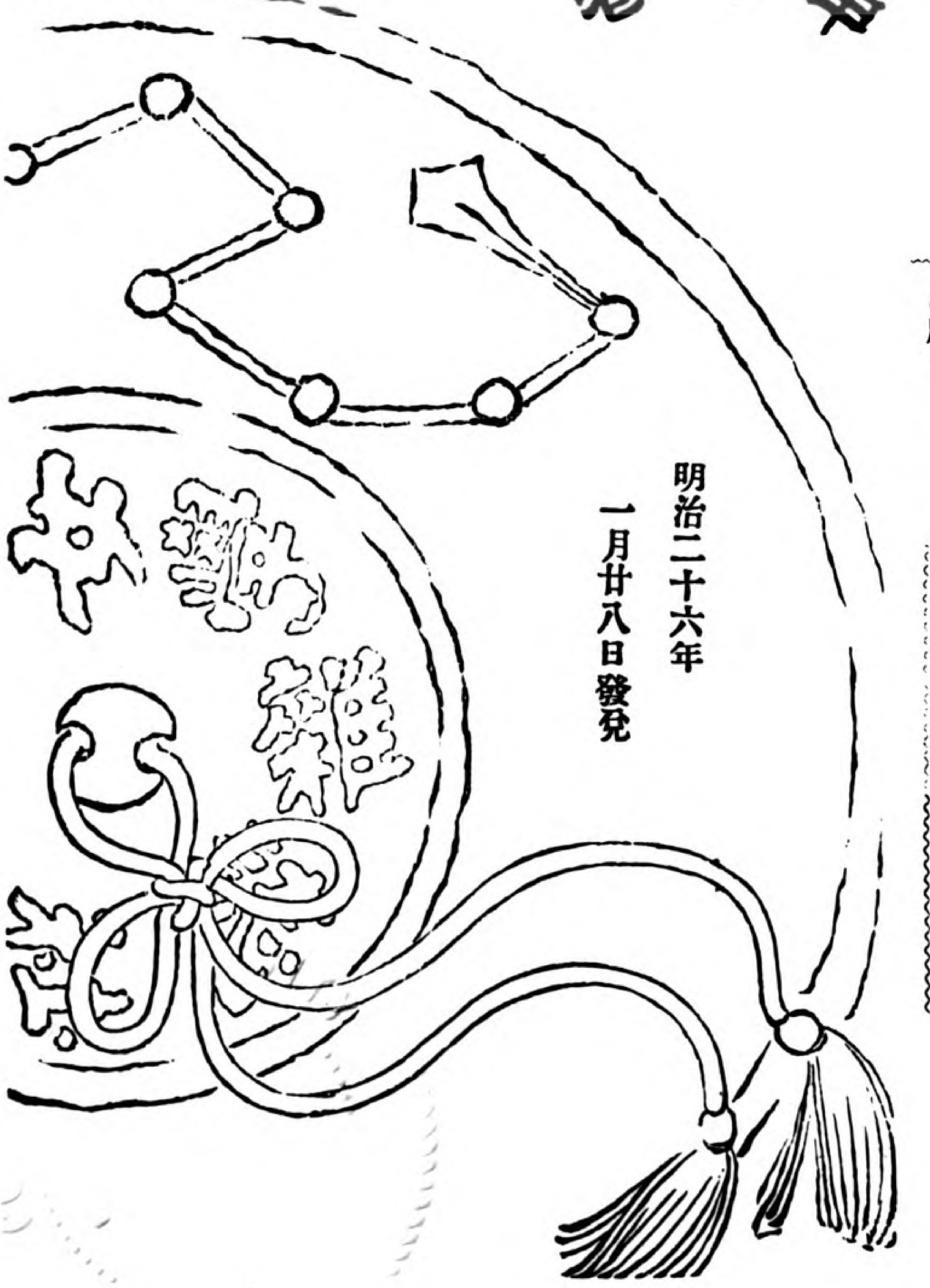
女學雜誌

第三百三拾七號

甲の巻



明治二十六年
一月廿八日發兌

注意

●社説　議會停會の飛報に接す
●論説　豪商界(下)商業の本道(天知子)
●史傳　日本の思想界に於ける事(下)棲月子
佛教傳來と其影響(畊雨散人)
●雜録　雜感(一)亂暴過激に二種類あり(二)知己と傳道(三)沈思瞑想(四)信仰より出る大勇(五)英雄の兩側面(六)人物の威儀(七)バプテスマのヨハ子(山月子)
三日の旅(花園女史)
箕子を讀みて(韻文)○探幽の鳴立澤を見て(韻文)殘花道人
此世(紫菀山人)
●批評　デビニチー○天啓教と聖書○中等唱歌
●開書　閣龍世界博覧會の費用並に其財源
●寄書　臆病者の十難、勇者の十德(養素子)
●片々

Jan. 1893

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 337. JANUARY 28th. 1893.

EDITORIAL:—Cessation of the Imperial Congress.

LEADING ARTICLE:—The Mercantile World (Concluded.)

BIOGRAPHY:—The National Sentiment (Seigetsushi). The Introduction of Buddhism and its Results.

MISCELLANEOUS:—Thoughts and Fancies. A Three Days' Trip (Kwaho). On Reading "Kishi" (A Poem). Tanyû's Illustration of the Shigi-tatsu-sawa

CRITICAL NOTES:—

BITS OF SCIENCE:—

HERE AND THERE::—

本號（第三百三拾七號）目次

○社説　議會停會の飛報に接す

○論説　豪商界（下）商業の本道（天知子）

○史傳　日本の思想界に於ける情（下）棲月子

　佛教傳來と其影響（晰雨散人）

○餘雜　雜感（一）亂暴過激に二種類あり（二）知己と傳道（三）沈思瞑想（四）信仰より出る大勇（五）英雄の兩側面（六）人物の威嚴（七）ペプテスマのヨハネ（山月子）

　三日の旅（花圃女史）

　箕子を讀みて（韻文）○探幽の鴫立澤を見て（韻文）殘花道人○此世（紫苑山人）

○批評　デビニチー○天啓教と聖書○中等唱歌

○閑書　閣龍世界博覽會の費用並に其財源

○寄書　臆病者の十雖、勇者の十戀（養粟子）

○片々

前週（第三百卅六號）赤表

●社説　米國婦人禁酒會年會

●雜録　在朝鮮日本婦人の希望。今昔物語。硬漢。昔の人今の人。風俗

●史傳　フランセス、ウイラード（其四）

●小説　內助（下）花圃女史

●兒童　吾が宿の花第八回（中）若松しづ子

●家政　家內重寶錄。饅頭製法。ぎゆうひ製造。生魚を酢にて貯ふる法。茶話會。田家のこよみ。農事の手當。園藝法、萠芽發生の解。

●理學　大風と指物師

●通信　各地通信數件

●女報　數十件

●孤兒友　博愛社孤兒院。孤女學院報告。北海孤兒院報告。

前々週（第三百卅六號）白表

●社説　新年經綸○決意奮起せよ○地方自治○文部省

●史傳　日本の思想界に於ける情（上）（棲月子）

●論説　豪商界（上）商人氣風の履歷（天知子）

●批評　「罪と罰」の殺人罪○尾花集（透谷子）

●小説　ローレンス（第一回）（若松しづ子）富貴。（訥住）。（蓁婁り）（樸の屋綾瀬）

●雜録　青年と英雄傳記（斎鵡子）山本覺馬氏の逝去（淡洋子）

●片々

●附録　ウヰルヘルム、テル（紫苑山人）

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第三百卅七號 明治二十六年一月廿八日

社説

議會停會の飛報に接す

議會は遂に停會となれり、停會中果して何事かある。議する者の曰く、將に解散せられんとす、停會は其の準備の爲め也と。果して解散せられたりとせよ、解散後抑そも何事かある。解散の要は、當議會を輿論の府となさずして、更めて國民の意向に問ふ所ろあらんとする也、然れども、國民の意向は、解散を須たずして明々瞭々たり、誰か、一毛、一厘をも減ぜずとするものに同意を表せんや、上奏案未だ決せずと雖も、其の提出者と、贊成者との、人及び數を考査すれば、此案既に實決を經たるに均し。陛下、賢明、親しく輿論を明察し、公議を寛容し玉ふ。上奏の文、未だ階下に達せずとするも、國民の訴聲早く天に聞ゆるとなからずや。嗚呼大臣諸氏、何の成算ありて此の停會を斷行せりや。上は　陛下維新以來の御計に忠順せず、下は四千万邦民の意向に背く。大臣諸氏たるもの、果して、何の信ずる所かある。

議者又曰く、停會中に調和の策出ん、而して憲法第六十七條所關の豫算を再查し、更めて議場に問ふ所ろあるに至らんとすと。是れ蓋し奇策に非ず、實に當然の處置たりとす。政府にして、頑愚を覺り、正當の路に反るは、國家の慶事なりとす。

幸ひにして斯の如くなるとを得ば、此回一時の衝突は、暫らく、調停和解すべし、之れ寧ろ無きに優る所ろのものとす。然れども、之によりて天下方今の要事了れりとし、苟安を一時に貪ぼりて、他の大改革を猛決鋭行するとなくんば、此回假りに調停したる衝突は、亦久しからずして復活し來らんと必せり。此回の衝突は、元因にあらずして、結果也。その種を去らずんば、年毎に新らしき芽を抽くべき也。

夫れ、盤錯に會せずんば、利器を便ずべからず、艱難山の如く孺子後へに瞠若たるの時に至らずんば、巨腕を揮ふと能はず。思ふに、立憲政代に入りてより、未だ太甚しき難機あらず、之れ則はち巨物の未だ現出すると能はざる所以か、若し

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

、斯の如く念じ來れば、此回の衝突の如き、寧しろ邦家前路の爲に祝す可き也。風波、船手を練り、戰闘、勇者を作る。議塲の紛雜と、內閣の搖動とは、蓋し、立憲時代の英物を掬養するクレードルなる哉。吾黨は、此の望を懸け、靜念して絕望せじと觀ず。唯り、痛慮禁ずると能はざる所ろのものは此際亦た蠻野の刺殺、獸力の闘爭に類する所爲の復盛し來らんと是れ也。

近世三四十年の間に於て、刺客に倒れたる故傑の姓名を列擧し、誠念之に對して、其人の一生を追懷せよ。あゝ若し彼等にして、今あらば、國運の進步そも〳〵何如んぞやと。あゝ、もし不幸にして、此後再たび如此きとありとせば、邦家の紛雜は、即はち邦家の健兒を殺すもの耳、亦何んぞ俊傑を之が爲めに誘引するものとならんや。

近日の最大怪事は、議塲に於ける議員の腕力沙汰頻りなると決闘條例廢止案など云へる馬鹿を極めたる法案の現はれたると也。彼等議員は、代議士と稱す。言論自由の聖なる權理に據り、衆議院と云へる國民の大舞臺に於て辨論す。而して、其最後の判決を、腕力によりて訴たへんとし、又腕力によりて、辛うじて氣節を維持せんとす。痛ましき哉、此等の人、其の頭腦は立憲時代のものならず、其氣節は文明國の道德にあらず。

新聞雜誌中、此等の現象に痛恨せるものありや、無しや。吾黨之を聞くと少くして、之に喝采し、之に嘻樂するもの、太はだ多きを見たり。戚然として、之に憂ふれば、人は笑つて曰ふ、之れ小事なりと。あゝ、今の議者が所謂る大事とは、抑そも何等の事ぞ。

聞けよ、同胞。眞誠の文明は、浮薄なる外形事業を以て買ふ可らず。政黨の一浮沈、內閣の一起倒をもて、俄かに之を論たすと能はず。たゞ、國民の思想を敎育し、其精神を發揮せしめ、根本々元より大ひに需むる所ろのものありて、而して後ち能く之を受領す可き也。然るに、今の志士は、國民の思想に大關係を及ぼし、國民の精神に大影響を與ふべきものを見る每に、常に冷然たり。日に日に齷齪として、而も日々に同じきとを繰反す。邦家依然として舊の如く、天下一歲遂に新らしきとなし。日出でゝ日入り、月盈ちて月缺け、而して彼等は草の花の如く過ぎゆかんとするか。嗚呼、痛歎すべき

は、我國の現舞臺に飛躍せらるゝ多數の志士諸君也。

東方問題年ごとに迫り來り、亞細亞全洲と云ふものゝ運命を考ふ可き時機いよ〳〵近づき、大日本帝國が之に處する千古一遇の大機會すでに既に眼前隱見のうちにあり。曉の鐘、天の一方に鳴りひゞき、旭日、早く海東に照り出でたり。同胞よ、同胞よ。何んぞ、之を顧りみるとの遲々たるや。

念ふて玆に至り、飜がへつて、議會對內閣當今の景勢を考がふる時は、幾多の憂思あり、何如にして之を慰せん。

則はち、肅然として、內閣諸公に告ぐ、諸公、もし斷じて、解散を行はんとせば、速やかに爲せ、之を爲すは、諸公が自信の强きを示す。吾黨は寧しろ之れを賀せんとす、然れども、一と度び解散を行ふの后は、將來の議會に向つて、大ひに思ふ所ろなくんばある可らず、議會再たび現時の如くば、諸公は則はち袖を連ねて總べて辭職すべき乎。諸公にして若し此の決意あらば、速かに今ま解散すべし。と。

又、謹みて、議員諸公に告ぐ。公等が今回の處置、實に當を得たりと云ふべし、吾黨生平一々公等と感情を同うするとなし。然れども、今回の處置に至りては、双手を擧げて、之に贊せざるを得ず、但だ、深く諸公に望む、諸公は代議士なり、內閣の候補者にあらず。諸公もし政府乘取策に意あらば、他に於て之を爲せ、代議士としての諸公は、一意誠念を以て國の立法を代議淸決すべき耳。諸公に野心あるの時は、則はち諸公が神聖なる榮威の効を失ふの時也。と。

吾黨旅天にあり、議會の近況を聞きて、憂思煩悶す。則はち、滊車に乘じて東海道を走るの日、車窓を開けば、正に舊彥根藩の山下にあり、時に雪大ひに下り、四面皚々として、万物の光景一變し、美趣人をして恍惚たらしむ。詩情大ひに動き、超然として、仙界に入るの心地す。乍まち、俄然、方今の時務を想起して、獨り語りて曰く、あゝ、美神の前に立ちては、人、何人か邪心あらんや、皆當に羽化して登仙すべき耳。冀はくば、內閣の諸公と、三百の議員諸公と、四千万の同胞と、此の雪を見、此の美に接して、共に和樂同情せんと。

編者、高知縣下漫遊を畢て、去廿四日無恙歸京す。不在中、讀者諸君に對し務を欠けり、謹しみて謝す、同人、多く、勸諭して旅行記を草せよと云ふ。次號に、新土佐日記數篇を抄出掲載して、諸君の中、余が此の行に掛慮せられたる知友の情に報ひ、以て游子の微衷を笑覽に供せんと欲す。玆に、先づ歸社を報ずるなり。

論説

豪商界

（下）商業の本道

天知子

人は食物のみにて活きるものに非ず、又生きんが爲めに生活するものには非ざるなり、故に人の働くは衣食を獲んが爲の目的に非ず、幸福の生活は金錢にて購ひ得べきものに非ざるなり、滔々たる現今の商人何ぞ金錢に盲化せらるゝの甚しきや、何ぞ人間たりしを忘却するの甚しきや、余嘗て豪商等が放言するヿを屢々聽きたり、彼れ曰えり、困苦して學問を修むる者何ぞ迂濶なるや金錢あれば直ちに多くの學者を使傭するを得べし人間萬事金の世の中なり金力を離れて復た人間あるヿなしと、余呆然として其痴愚に愕く、彼れは未だ學問の意味すら知らざるなり、人間の解釋も知らざるなり、金錢の精神を知るヿもあらざりしなり、憫むべし此物質凝固の木偶人、醒めよ覺めよ、汝は靈性を包める貴重の人類たるヿを知れ、何ぞ自ら卑しめて萬物の靈長たるを忘れ、商人の尊ぶべき天職あるヿを、忘るゝの甚しきや。

世界は夫れ茫漠たる宇宙に懸れる一の學校なり、人誰か此生徒たらざる者あらん、山川草木より吉凶禍福盛衰興敗何物か吾等の書籍たらざるべき、宇宙何所にか經典の捲き擴がらざる所あるべきや、唯心の盲目者此活文字を讀む能はず、心の聾者此經語を聽く能はざるのみ、世の職業とは即ち此學校の課程たり、人若し此課程を怠らば、天の大教師は忽ち是れに衣食の饑寒を以て罰鞭を其肉體に加へ、其心には懊惱痛苦の警戒を與えて之れに教ゆ、故に人にして職業なくんば必ず心荒れ氣煩悶え、下品なる者は終に放蕩に墮落し、稍々上品なる者も惰弱に退歩せざるを得ず、小人閑居して不善を爲す者實に此謂なり、職業既にレツスンたるを知らば、何れの職業に眞理の籠らざるものあるべき、之れを是れ斯業の道といふ、故に道を辨ぜずして其業を執るは之れ門前の小僧經を讀むに似たり、唯空漠々として衣食金錢をのみ目的に職業を爲さば何ぞ罰を免かれんが爲めに勉强するの痴鈍書生と異ならんや

學問を爲すは文字を覺へ議論を巧みにし以て一身の名譽を誇るの爲めに非ざる如く、人の職業を爲すも亦金錢を積み安逸を貪り以て富豪の榮曜を誇るの爲めに非ず、學問は識見を擴め思想を高尚にし以て人物を硏きて人類の進步を望むが如く人の職業は天職を盡して經驗を學び以て人道を硏きて人間の發達を計るにあり、然れば職業を爲す事に因りて其人必ず善化發達するを本道と爲す、若し其目的金錢の上にのみありて職業を爲さば其人逆道を蹈むが故に必ず惡化せん、曲學阿世の學者日に釀造せられ、佞利浮華の紳商世に跋扈するの現象、唯一に玆にあるのみ。

方今の商業子弟を見るに實に痛嘆に堪えざるもの多し、彼等は職業の熟練進むに從ひ、漸々詐術辨佞に巧みに、漸々輕薄巧利に薰化せらるゝに至る、商業のカケヒキは僞り言ふことと心得、人に親む秘訣は輕薄の辨舌を弄するにありと思ひ、利を多く得るの秘術は唯不眞實を以て瞞着するにありと信じ、道德は世慣れぬ人のいふ言と認定し、正義は理屈好きの頑固者が言ひ草なりと冷笑ふ、斯くして彼れは五里霧中に彷徨して金錢を追ひ金錢に追はれ、唯金錢の牢獄中に食ふては寢ね寢ては食ひ、金錢は何故に得ざる可らざるか人間は何故に生活するやは、彼等唯空々として日に進步することなく寧ろ退步の勢ひを爲す、而して主人は又此等の子弟を唯金錢を得るの道具として金錢を以て使役し、日に惡化せしめて偏へに狡猾巧利ならんを欲す、何ぞ主從の親義恩愛の起るべき理あらんや、主人の利己輕薄は早く其子弟に映りて甚しきは主を怨み主を謗り終には金錢を竊み去るもの往々にして之れあるに至る而して主人は未だ自からの足らざる誤まちなるを悔ひず、子弟亦た一身を零落するに至たりて未まだ主人の罰たりしを悔ひず、同じことを繰返し〳〵て日々に子弟を誤つもの滔々として絶えず、アヽ金錢の人を誤つや何ぞ斯くの如く甚しき。

凡そ人類が天より賦與せらるゝの產物は、風土氣候等の關係より受る所同じからず、或物は甚だ豊にして之れを用ゆるに餘りありて他の或物は全く缺乏する如き、是れ天惠の度は同じと雖ども天惠の產物は不公平ならざるを得ず、此の天與の物品を人類生活上に公平ならしむるの天職を負ふものは誰ぞや、即ち貿易の媒介者たる此の商人の他に誰とかす

る。抑々此天與物産の不公平なるとは實に人類進步上に缺く可らざる天惠たり、何となれば若し一樣公平なる天産に富む時は、誰か貿易の必要を感ぜんや、貿易起らずんば人々の交通起る可からず、交通起らずんば智識、氣風等の交換起る可からず、斯くせば人間、精神的物質的の兩つながらに進步するとある可からず、商人即ち此大使命を有す、故に商業の道は利己自營を目的とするものに非ず、ましてや俗物が最も執着熱心せる金錢を一種の經典として敎育するの方法を有するが故、金錢敎育の輕んずべからざる勢力あるとを識認して、店舖は一の學校なるを記憶せずんば非ず、店舖は事業場なり又た敎育場なり、何となれば事業即ち敎育なればなり、故に天命を遵奉して眞理の下に働くもの衣食に苦慮せずとも必ず窮することあるべき筈なし、天必ず無辜を殺さず何を苦んで衣食にのみ常に拘々たるや、利己の法外慾は終生汝を滿足安心するとを得せしめざるなり。

事を爲す、必ず秘密とすべきものあり、發表すべき機會も亦あるものなり、其進退の機を察して或は秘密を有ち或は之れを發表すると、商法に於て最も肝要なり、之れを商業のカケヒキといふ、何ぞ人を僞るの事ならんや。商法は之れ一の交際術なり故に親和の氣風を要す、然れども輕辯佞舌を以て人の歡心を買はんとするは人と親睦すべき手段には非ずして却て不親和の始めなり、正直眞實を以て人を敬し人を重んじ、剝げざる深き親睦を以て信用を堅むると第一の商業手段なり物品信用の敢果なき現象に傾きし今日の經濟社會と雖ども、人間到底道德信用に打勝つ信用ある可らず、信用は資本に非ずと雖ども第一の資本力なり、此資本力は實に强大なる商業基本力に非ずや何ぞ道德を以て迂遠なりと言ふ人の迂遠なるや、敗德亂離の家永く榮えしを聽かず、不德非道の豪家にして未だ家産堅固の信用あるを聽かず、德を養はざる家の萬金は一時の泡沫に似たり、一尺金錢を延せば之れを破壞せんとする子弟は一尺の惡化を受く、斯くして積みたる金は其の子孫を放蕩にし同時に又放蕩の子孫を惡生し、恰も石を積みては惡鬼之れを崩し、又營々として積みては傍より又之れを崩すの兒戯に似たり、汝何を樂むや何を誇るや何に安んずるや何に得意なりや、ア、道を思はざるの事業は藁の家にも似たるかな眞理を考へざるの人は藁人形に似たるかな無常の火之

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

れを燒かば如何なる灰をや百年の後に殘すべき。

我れに一掬の涙なくんば止まん、我れに一片の誠なくんば已みなん、微々たる小冊子素より重任に當るに足らず、唯斯道に志ある隱士を紹介して熱血を注ぎ、併せて古庵を思はしめん、此志は正にこれ

時鳥鳴音やふるき硯箱

文學界　第一號

去る廿五日發兌

わが好讀者諸君と幽味得て言ふ可らざる文界に逍遥し、便り少なき人の爲めに好修養場と成り道を談り想を練り、質實を重んじて一方に實のある事を案じ趣味を勉めて一方に花のある事を勉めんとす、一片の微衷は正に是れ

風流のはしめやおくの田植うた

史傳

日本の思想界に於ける情（下）

棲月生

戰國は鍛錬の時期なり、意志の人心の一人舞臺をなし、情は何處へか跡を隱すの時期なり、鎌倉時代に次で戰國は來りぬ、當代は兼好を出したりき、彼れは永く迷宮なりしも其の雲霧を拂ふて世に出づる近きにあらんか、われは只彼も情の人なりきと言はん、徒然草の復雜なるは其證ならん。然れども南北朝を歷て足利の世に暫時の平和を得、續て應仁の亂より元龜天正に至り世は暗澹たる内に沒しぬ、此は日本思想の大修錬期なりき、之より思想の一變するの期なりき、吾が國は此の古今未曾有の戰亂に遇ひ、思想に堅固なる意志を與へたり若し夫れ後來德川氏の世に出で來る文學が如何なるものなるか、を見ば、此の戰國は其の豫備の時代なりしなり。

水尾の流は其昔鎌倉に覇府を開きてわが國史の一時期を畫し今は又、江戶の都に溢れし大河をなしぬ、此は國史の一大時

期なるのみに非ず、文學上の大時期にてありき、此の時代に於てわが國民の思想は幾多の力に左右せられつゝ、上下に渡りて顯れたり、而も夫の情の流は失せざりき、武と禪とは兩々相携へて意志を强からしめたり、爰に程朱學は藤原惺窩を紹介して入り來れり、儒敎の立つ處何れにあるかに拘はらず程朱の學に至りては意志的のものとなりしは事實なり、人の思想を導て實行を擧げしめ、天下を經營せしむるの具となれり、今や情と意志とは合して德川氏の世に文學として顯はれり、其の俳諧、漢文學、和文學、小說等は好く之れが說明をなさん。

平民の味ひたる文學俳諧は、和歌と同じく女性國の特質を取りて優麗柔軟なるべきに、少しく異りたる顯象を出せり、之れ實に宗敎にあるべし、鎌倉以來禪は一種の勢力をわが國民の思想に及ぼしたる事前に言ひき、俳諧の中興芭蕉、彼れは山家と禪との幽玄を骨子として風雅を狂愛せり、是れ彼れが又情の人なりしが爲ならずや、古池の句は彼れが禪道の幽玄を知る可く、いざ行かん雪見にころぶ處まで」彼れが信仰の大なるを見るべし、われは先づ彼れに於て情と意志との合躰を見き。

漢文學は重もに程朱の學なり、其の思想は實行的にして詩眼少し、左らば彼等は文人たりしと雖も又政治家たりき、新井白石の如き、室鳩巣の如き、幕府に仕へて其事業の赫々たるは、わが國稀れに見る處なり、和文學も亦長足の進步を爲しぬ、然れども和學家の事業が多くは註解に屬せしを以てせば批評的の時代にてありしならずや、われ未だ彼等の詩眼と王朝時代の詩眼と異るや否やを知らず、只信ず兩個の王政復古の伏線をなせしを見ば、彼等は日本國民の本性、情の人なりしや疑なきが如し、這般の事一朝に論じ盡すべきに非ず、暫らく疑を存す。

德川時代上流の社會には宗敎と武と儒學とありて情の發顯に苦しましめけれど、下流にありては然らず、俳諧を除いては、平民に以上の制裁一つもあるなし、佛敎の如きも彼等には、眞實に解されざりき、左らば此處には純粹日本の特性を顯はせり、德川天下を一定せしより世は太平に赴きぬ、太平の世に於ける日本の思想は如何、王朝の時の如きか、然り、然れども彼れは上流社會にして是れは下流なり、其差ありて

やは。江戸ッ兒を見よ、彼れは當代平民思想の代表者たり、彼れには學なく智なし、然れども一片の情は彼れの心を支配せり、此の情實に彼れをして其名を今日に止めしめたり、彼等には天眞愛すべき處あり、然れども文學として顯れたるもの、西鶴一派の小說、近松一派の戯曲、洒落本人情本とす、彼等の思想には制裁なかりき、故に日本の思想を顯すと同時に卑猥に墮るを免れざりき、前に言へる奈良朝の愛すべき戀は、其脈終に絕へず、爰に平民社會に顯れたり、彼等が寫せし處悉く下賤卑猥なりし事、此國文學の爲めに惜しむべし」

然れども世は何時まで審美的產出なくして止まんや、眼界と區域とを廣めし社會は、往昔の如く和歌の一手を以て滿足するものに非ず、此の需用を充すものは何ぞ、西鶴に起りし小說は一轉種彥京傳に至り、終に馬琴を出せり、(馬琴が詩眼の少きにも拘はらず、能く多數の讀者を得しは抑々彼れの小說が儒敎的なると日本的情との結合を示し、當時の人心に滿足を與へしに由るに非ずや。

武は實に戰國以來吾が國民の思想に固着し、徳川の十五世に渡りて一貫せしものなり、之れ前にも言ひし如く情の上に立てられたる意志に非ずや、武的精神は非常なる力を以て運動するも、其の左右するは情に從てせり、武士は食はねど高楊枝」と之れ英國の意志を基とする人種と異る處か。

右に擧げしものわが文學の概畧の概畧、然れども日本國民の思想の情即ち女性的優麗にある一端を示すに足らんか。

現代は如何に、維新の革命は啻に物質上に於て日本を打破せしのみならず、兼ねて舊思想も破壞せり、武的精神は打破せられ、儒敎主義を稱ふるもの迂と稱せられ、佛敎腐敗せりとせらる、今日の思想は情に任せて打ち步みつゝあるなり、故に文學の思想界には美妙喜ばれ、篁村愛され、紅葉迎へられぬ、而して二葉亭の如き嵯峨の屋の如き、其の著作が不滅のものたるに關はらず、人の好む處とならずして過ぎ行けり、之を以て今日の思想界が如何なるを知るべし、幸にして露伴の如きが愛讀さるゝを賴みとす、知らず不知庵の「罪と罰」多數の人に愛讀さるゝや否や。

後來此の國民の思想は如何になり行くや、永く此のまゝに進ましむ可からず、左はあれど情は其の基にしてわが國民の尤も貴むべき處なり、此の情に一大洗禮を授くる者は何ぞ、わ

が友嘗て言ふ日本の精神に永遠なる思想を注入するは之れ大洗禮なりと、われも亦其の至言に服す、而して永遠と之に從ひて來る意志と情とを結合して進ましむるものは、基督教に非るか、將來吾が國民の思想を導く者夫れ此の敎にはあらざるか。

別離

古藤庵無聲

別れとは悲しきものといひながら、
旅に寢ていつ死ぬらんと問ふ勿れ。
よしやよし幾千年を經るとても、
花白く水の流るゝその間、
見よ〳〵われは死する能はず。

送古藤庵

天知子

骸骨二つ重たそうなり霜の旅

佛教傳來と其影響

眄雨散人

欽明天皇の十三年(西曆五百五十二年)冬十月百濟の聖明王、釋迦佛の金銅像一軀、幡蓋若干、經論若干を獻じきたりて其功德を讃稱せしかば天皇群臣に其禮すべきや否やを歷問し給ひしに蘇我ノ大臣稻目ノ宿禰は之を禮すべきを奏し物部大連尾輿、中臣ノ連鎌子は我國既に國神の有るなり蕃神を拜せば恐らくは國神の怒を致さんと奏せしかば天皇之を稻目に賜ひしに稻目大に悅び小墾田の家に安置し懃に出世の業を修し向原の家を捨てゝ寺とせり然るに其後疫病大に行はれ死亡する者多かりしかば尾輿、鎌子は之を以て蕃神を禮するの致す所なりと爲し天皇に奏して佛像を難波の掘江に棄て伽藍を燒燼せり爰に蘇我氏と物部氏、中臣氏との軋轢を考ふるに其由來する處甚だ久しかりしが如し此三氏皆名家にして物部氏は天神の子饒速日命の子可美眞手命の子孫にして可美眞手は神武天皇の時に禁軍を掌どりて殿內に宿衞に且中食國政大夫に任ぜ

られし程にて天皇の御信任淺からず其六世の孫十市根の時始めて物部連といへる姓を賜へり其尾輿に至るの間に膽咋、伊莒弗、目などいへる人々ありき

中臣氏の遠祖は即ち天兒屋命にして天照大神の天石窟に入り給ひし時其再たび出たまはんことを祈禱し瓊々杵尊の高千穗に天降まし丶時には之に依りて日向に降り其後裔天種子命は神武天皇の東征に從ひ祭祀を主り子孫相繼ぎて以て鎌子に至れり

蘇我氏は即ち孝元天皇五世の孫、武內宿禰の子、蘇我石川麻呂に始まり滿智、韓子、高麗等相承けて稻目に至れり武內の子又平群木菟、紀角、葛城襲津彥ありて共に要路に當り平群氏には眞鳥、鮪等不忠の臣あり葛城家は數々后妃を出し其圓は眉輪王を回護せり

此他上古有力の家を大伴氏とす大伴氏は神武天皇の功臣道臣命の子孫にして亦武事を掌どり武日、武以、室屋、談、金村狹手彥等皆有名の人なり

以上四氏の中、中臣氏を除くの外一は大臣たり一は兵馬の權を有せしを以て自然權威を弄し仁賢天皇(廿四代)の崩御に際し平群眞鳥は簒立を圖りしかば大伴金村は眞鳥父子を誅して武烈天皇(廿五代)を擁立し其崩ずるや金村又繼體天皇(廿六代)を迎立し物部の麤鹿火と共に朝權を握りしが金村の死後大伴氏は三韓の方面に當りしをもて欽明天皇(廿九代)の頃には蘇我物部の二氏最も勢權を有せしなり而して一方は海外征服者の子孫にして韓、高麗等を以て名とせる人さへを出せる開化主義の家なるに一方は保守主義の武官にして神官と結托せしなれば其外敎に對し意見の相合はざるは當然の事なるべし

欽明天皇の朝には保守黨一時勝を制して佛法を禁ぜしも敏達天皇(三十代)の時に至り佛敎再び渡來せり時に尾輿の子守屋稻目の子馬子共に朝政を執りしが馬子佛敎を崇信し疫病流行せしかば守屋は中臣勝海と共に之を以て佛法興行の咎なりと上奏し又佛像を燒き之を難波の堀江に棄てたり是より蘇我物部の二氏益々怨恨を生ぜり而して敏達帝は瘡疾を病みて崩御まし〱しかば天皇の寵臣三輪君逆は敏達帝の皇弟用明天皇(卅一代)を立てたり是れ蘇我氏の出にして且佛法を信じ給へるに由るなるべし然るに守屋は皇弟穴穗部皇子を立てんと謀

り皇弟と共に兵を率ゐて池邊宮を圍みしかは逆ば逃れて敏達帝の皇后豐御食炊屋姫尊（推古）の皇宮に匿れたり穴穗部皇子守屋と共に逆を攻めんとせしに馬子皇子を止めて行かしめざりしかば守屋獨り逆を攻めて之を斬殺せり是に由て炊屋姫皇后は馬子と共に穴穗部皇子を恨みたまへり

既にして用明天皇も亦瘡を患へ玉ふて三寶に歸せんと思し玉ひしに守屋勝海と又之を諫止め各々衆を集めて爲す所あらんとせしが勝海は舍人の爲に殺され天皇も亦同し年の内に崩じ玉ひき是に於て守屋は又穴穗部皇子を立てんと謀りしかば馬子は炊屋姫尊の詔を奉じ穴穗部皇子を害し又諸皇子と群臣とに勸めて物部氏を滅せんと謀り泊瀬部廐戸等の諸皇子及び紀巨勢、葛城、平群、等の同族と共に守屋を攻めしに守屋大兵を以て善く戰ひ數々馬子の軍を退けしかは廐戸皇子は四天王の像を作くりて戰勝を祈り遂に守屋を殺し泊瀬部皇子を立てたり之を崇峻天皇といふ

是より後馬子益々專横なりしかば崇峻帝御心安からず思して此事を廐戸皇子に圖り玉ひしに皇子は之を忍び玉ふべき由を奏せり然れども天皇多く伏兵を設け給ひしかば馬子畏れて天皇を弑し豐御食炊屋姫尊を擁して天皇の位に即かしめたまへり推古天皇と申すは即ち是なり而して廐戸皇子は密に馬子を誅せざりしのみならず推古天皇の皇太子と爲り悉く万機を攝行せり

爰に再び欽明天皇の十三年より推古天皇の元年に至る四十一年間の出來事を考ふるに佛法取捨の爭論は保守開進兩主義の衝突にして之に加ふるに舊來軋轢し來りし大臣大連間の政權爭ひに外ならず

廐戸皇子即ち聖德太子に至りては古來種々の論あれども亦善く佛敎を用ひし人といふべきか日本紀を按ずるに太子は用明天皇第二の皇子にして守屋征討には大功あり崇峻帝弑逆の際には敢て異議を發せず而して神武天皇以來千二百餘年間未だ嘗てあらざりし所の女帝を立つるに及びては其皇太子と爲りて萬機を行ひ玉ひしなれば太子にして推古帝万歳の後までも御存生ましま〳〵しならんには天子と爲りたまひしや疑なし而して太子は佛敎を借りて以て物質的開化を我國に輸入せしなり之を要するに太子は我國を改化するの御志ありしならん然れども其地位を得ざれば之を行ひ玉ふこと能はず故に皇太

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

子と爲りて太政を攝し玉ひしならんか蓋し我國上古の俗質樸簡潔にして華美の風なし然るに佛法渡來より寺工、鑪盤工、瓦工、畫工、樂工等續々我國に來り寺塔を造營し佛像を彫畫し建築彫鑄繪畫伎樂の諸術大に進歩し暦本、天文、地理、遁甲、方術、度量衡も亦傳來し且高麗百齊の僧學問伎術に長ずる者多く來りて宣敎の傍民利を與し効績多かりしかば佛敎益々弘通せり

太子猶之を以て自ら足れりと爲たまはす朝制改革を行ひ冠位を定め朝禮を改め憲法を作くり歴史を編修し又區々たる韓土とのみ交際するを以て足れりとせず直に書を日沒處天子に致し且多く學生僧侶を遣はせり其計畫する所亦大なりといひつべし去れば太子の薨じたまふや天下百姓愛兒を失ひしが如く哭泣の聲行路に滿ちたりといへり當時の人望を得たる以て想ふべきなり然れとも其馬子と結托し馬子が皇叔父を弑せしも敢て之に忤はず皇叔母を擁して自親ら攝政たるに至りては古人之を議する者多し但太子か我國物質的開化に如何なる進歩を與へしかを考ふるも決して徒勞には非らざるべし是れ余が此文を草する所以なり抑永祿天正の際耶蘇敎徒の敎を我國に傳ふる其方法佛敎者に似たる所ありしが中道にして拒絶せられたり今の基督敎を傳ふる者未だ昔時の佛法の如く要路の人を聳動するに至らず是れ其傳來日猶淺きに由るか抑又時勢之をして然らしむるか事に此に當る者考一考して可なり

ひとこゑの夜半を過るさむさかな　（野坡）

雜録

雜感

山月子

(一)亂暴過激に二種類あり

一概に謂ふを勿れ、亂暴過激の者、よく道を聽かば、一變して善き信仰の人となるべしと、若し斯の如く思ひて傳道せば、必ず意外を感ずることあるべし、吾人は其人の亂暴過激を見ば、其由て來る所の根源如何を察することを要す、其義憤俠動より來る者は、實に愛すべく望多きものなりと雖も、其外界の事情に驅られて、正義人情の忍ぶべからざるを忍ぶが如き者は、之を導くに於て頗る困難なるものありて存す、蓋し甲は耳心鋭く、乙は耳心鈍く、甚しきは殆んど其感覺さへ失へる者あるなり、傳道者須らく此區別を知らざるべからず。

(二)知己と傳道

傳道者熱心に語りて、却て人の誤解を惹き、人の誹謗を來すことあり、不信者よりの誤解誹謗は、情に於て忍ぶ所あるべし、然れども信者、朋友等よりの誤解は、自ら苦を感じ、自ら責むること多き者なり、殊に信仰修養に鋭なる人は、或は「其誤解を起さしむるは、それだけ己の心の濁りて、主の光を蔽ひしにあらずや」と自ら反省する事あるなり、然れども吾人は爰に一の問題を考究することを要す、即ち「己を知らるゝに非れば、道を傳ふることを能はざる乎」といふことなり、抑も傳道は、其人の心をして神に向はしむるにありとすれば、己を知られずとも、然せしむることを得るなり、譬へば、甲の人、責任を帶びて熱心に語る、多くの人の中、或は實行無く空言する者と誤り、心之が爲めに慷慨し、之が爲めに祈ることありとせん乎、甲の人は己を知れざりしなり、然れども他をして神に向はしめたり、それだけ傳道の成功ありしといふ可なり、是れ一例なりと雖も、斯の如き場合は、往々有ることなるべし、吾人が他に誤らるゝのみならず、吾人の他を誤まることも、必ずあることならん、誤る者、誤らるゝ者、共に祈る心あらば足れり、主は曰く「人の家にいらば其平安を問、その家もし平安を得べき者ならば爾曹の願ふ平安は其家に至らん若し平安を受べからざる者ならば爾曹の願ふ平安に爾曹に歸るべし」と。

(三)沈思瞑想

或は密室に、或は林間に、或は山上に、人を離れて沈思瞑想する者は幸なる哉、彼は秘密の天地を有し、彼は秘密の交際を有す、而して彼は秘密の進歩を來す、想ひ見る、彼が端坐瞑想、地を離れ、肉を離れて、直に主に連るの時、主か、彼か、彼か、主が、彼れ主に在り、主彼に在り、超然として高し、高きを感ぜざるが故に眞に高し、悠然として靜かなり、靜を覺へざるが故に眞に靜かなり、習慣第二の天性を作り、彼れ之が爲めに次第に、常に高く靜かなるに至る、道場に養ふの武、其人をして武の人たらしむるが如く、人なき處に養ふの信仰、其人をして信仰の人たらしむべし、吾人は深く彼を愛し、彼を好む。

(四)信仰より出る大勇

眞誠の信者は、必ず大勇の人なり、而して其勇、或は其儘に顯はれずして、却て怯の如く、顯はるゝことあり、誰か使徒パウロの信仰と大勇とを疑はんや、然れども彼はコリントの人に書を寄せて曰く「我なんぢらと偕に居し時は弱かつ懼また多く戰慄り」と、是れ怯の如くして却て其大勇なる所にあらずや、彼れ斯の如く主と人とに謙遜なるが故に、主彼に宿る、主彼に宿るが故に、彼の勇は、彼れ自身の勇に非ずして主の勇たるなり、

(五)英雄の兩側面

彼れ一方に於ては、激烈狂夫の如し、或はイザヤの叫びとなり、或はクロムウエルの手となる、彼れ他方に於ては、脆弱處女の如し、或は項羽の悲歌となり、或

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

は劉備の熱涙となる、顯はるゝ所、强弱相反すと雖も、其本は一なり、一の濃情深感なり。たゞそれ濃情深感なるが故に、他人のそれ程に感ぜざるも、彼れは感じて狂夫の如く、或は處女の如し、然れども記せよ、彼が斯くの如きは、必ず其最初に於て、善惡の判斷を遂げて後なるヿを。

（六）人物の威嚴

一隊の兵卒、下吏、炬と兵器を携へて、イエスを捕へんとして來る、イエス彼等に曰けるは「誰を尋るか」、答へて曰く「ナザレのイエスなり」、イエス曰く「我は其なり」と、時に彼等退きて地に仆れぬ、吾人は福音書を讀みて此處に到る毎に、未だ曾て仰で神の子の人物の如何ばかり神威ありしやを想望せずんばあらず、嗚呼神威、吾人其キリストを信ずるならば、吾人の人物も亦自然に神威の尊むべく犯すべからざる者出づべき筈なり、之を思ひ之を考へて未だ得る所あらず、一夜忽然として思ふ、義烈急激の人は、最も之を養ふに便利なりと。主は教へて曰ふ「右の頰を批ば亦ほかの頰をも轉して之に向けよ」と、無氣無力、平生怒るヿさへ能はざる人、此教を淺く聞き輕く取り易きものあり、而も義烈急激の人は、愛なる義なる神の教なれば、如何にもして斯の如く忍ばんと思ふも、其性忍び難し、抑も如何にして之を忍び之を制せん乎、我れ自ら激烈なり、故に我れ自ら之を制すべからず、故に我よりも力あり威ある神に頼らざるべからず、此必要は、號哭、嘶願、鍛錬を生じ、我の勇を沈むると共に、神の威嚴勢力等を我裏に、知らず〱得るものあらんとす、パウロ曰く「神の慈と嚴なるとを觀よ」と、此心ある者は、以て愛すべく以て敬すべき人、以て仁慈威嚴並び行はるゝ人となるヿを得ん。

（七）バプテスマのヨハネ

主を愛すと稱する者、豪傑を愛するヿを知らず、豪傑を好む者、未だ主を好まず、二つながら可ならず、夫れ豪傑愛すべし、主の心を以て之を愛し、而して又主に達すべし、豪傑をすら知ると能はざる輩は、何を以てか主の人物を知るヿを得ん、然れども豪傑のみを好みて主を好まざる者に至りては、吾人其不幸を憐む、主は曰く「女の生たる者の中いまだバプテスマのヨハネより大なる者は起らざりき」と、而してヨハネは曰く「彼は益々榮へ、われは益々衰ふべし」と、嗚呼是れ世上豪傑の聲を代表する者に非ずや、衰ふべき者のみを理想す、不智も亦甚し、たゞ彼を透して主を觀ればこそ、彼の人物は生くるなれ、若しもヨハネを愛し、眞正豪傑を愛するならば、彼等の尊ぶ、彼等の生命なる、主を愛し主に事ふべきなり。

一日の旅

花圃女史

かゝなへればいにしへ人のさだめおきけん夢の半ははやきたりぬ、廿年餘りをいかさまにして過しけん、心はきのふにかはらねど去年ほどあら玉のとしの始などいへど心うきたゝず幼なめきたる遊びも何となくはづかしきやうにてなどかたりしより鎌倉江の嶋みせばやとてともなはれぬ、一日の朝とく旅立て八幡前の宿につきぬ、あたりの有樣はげしき南風におそれてようも見ざりつれどこゝぞ鶴が岡なるなど聞ばかの鳴音をぞおもひ出らる

鶴が岡つゆけき袖をひるがへし
心のうちに音をやなきけむ

などくりかへす、頼朝の墓をこゝしき石段のぼり面をうつ砂のいたきをしのびてみる

こけむせしおくつき所みてもなほ
くちぬ其名のなつかしきかな

八幡の名所にてかたへの銀杏をあふぎて

今日かくとしらで有けんかたみとて
殘せしかみの毛すぢばかりも

虫のしらすなど人のいふとのようあるものなりなどおもひつゝ土の牢へと行ぬ、こゝはみるも涙なん落ると人のかたりつれどついに見あへずして宿に立歸りあすの朝とう大佛長谷などみて江の嶋へとさして七里が濱をかちよりぞ行く道に松の並木あまたありてくねれるふりもおもしろし

吹すさぶ磯山松のまつ風に
折々まじるなみの音かな

曇りなく心もはれしあしたかな
かひのからふみ浦づたひして

とはいへどけふは西風あらう明て砂烟に目もあきあへず、ゆき行て山をめぐれば江の嶋浜の木にうかびたり、手にとる如くにはあれど行ば遠しと聞もうし、しばしつかれ休めんと磯におり歴にあげて貝などひろはんとするに風あらう吹加はりてたちどあやふきもおかしき限りなり、

めのまへによせくる浪の大岩に
くだくる事もおもしろきかな

窟へも行つれどたゞ〳〵涙のひまをみてあわたゞしう心空なりつればようもおぼえず、たゞ穴の富士の裾野につゞけりなど聞しをおかしとおもひぬ、こゝを立出片瀬を過て藤澤より歸りぬ、病の爲一とせ大いそへ行しをはじめにてつぎのとしは箱根熱海へものしぬるろ今年は又鎌倉江の島をみつ、されどもみつてふ名のみにて名所古跡さぐるべき才なくかつ多くはいそぎて見殘しゝをいかに人の笑ひやせん、そはとまれかくまれ、おのれのみはそこはかとなく心すゝみし旅なりしと我家の門に入らんとする時寶船〳〵とよぶ聲しきりなり。

陶淵明の讀史述九章のうち

「箕子」を讀み其意を今樣ぶりに

殘花道人

去鄕之感。猶有遲遲。矧伊代謝。觸物皆非。
哀哀箕子。云胡能夷。狡童之歌。悽矣其悲。

淺茅ヶ原のあさましや、
君の宮居はあれにけり、
匂へる花も啼くとりも、
涙をさそふよすがにて、
道にさまよふ箕子ひとり、
いくちとせへし今もなほ、
汝が唐歌をよむときは、
袖に時雨のかゝるなり。

探幽の畫

「鳴立澤」を見て

同人

くれゆく方をつくづくと、
こゝろにしめてながむれば、
造化のみ手にいだかれて、
身は恍惚とゆふぎりの、
さわたるうちに入りにけり。
秋のはだへは夢さむし、
蘆間をいづる水鳥の、
羽ばたく音に現身(うつせみ)の、
もとのこゝろと還りけり。

櫻井明石君重譯
フヒリツプ物語　近刊
悲しむべく喜ぶべく驚くべく憎むべき境遇の變化、涙なくして讀みなへられざる悲慘の物語。

農科大學星野愼之輔君編
應用植物編及び詩經植物集　近刊
藥用、毒草、凶年救荒用等實用十五大部の植物を網羅して親切至れるの書なり、殊に詩經植物は吾邦の植物に解釋して文學上關係する所淺からず、支那人の歌ふ詩花詩草を詳らかに知れば以て其國人の風趣を知るに足るべし。

(女學雜誌社)

此の世

紫苑山人

雪のかきくらし降るひねもす、ながめくらして、世の人のすさまじきことにいふなる、師走の月夜の、くもりなくさし出たるを、み簾まきあげて見給へば、むかひの寺の鐘の聲、枕をそばだてゝ今日もくれぬと幽なるを聞きて、

おくれじと空ゆく月をしたふかな
終にすむべき此の世ならねば

風のいと烈しければ、蔀おろさせ給ふに、四方の山の鏡とみゆる汀の氷、月かげにいとおもしろし、

是れ乃ち天が一種のインスピレーションを與へて、或る種の人類を代表せしめたる、紫女史の筆尖より迸らしめたる血涙の痕跡にあらずや、

我儕は此の幕屋に居りて歎き、天より賜ふ我儕が家を衣の如く著んことを深く願へり矣、あゝ我儕は此の幕屋に居り、重きを負ひて歎く也。

家にあればげに盛るものを草枕
たびにしあれば椎の葉にもる

吾人すでに實旅なる、豈泰白を待て後に知らんや、唯だ吾人をして、同行者を観察せしめよ、

今や吾人は此の社會てふ乘り合ひ船に乘りこみて、數多の旅人に打ち交はりつゝ、數多の形影を雙眼の網膜に映らしむる也、看よ一種の徒あり、

厭世的旅行者　とはふ、分れて二となる、曰く

不平者　人事百般一として、其意に滿つるものなし、故に善く反動す、既に善く反動す、人是なり、乃ち是に反動す、人非なり、亦た是に反動す恰も「はねつるべ」の如し、或ひは文學家、或は哲學家、或は政治家、時に其の服裝を異にすると雖も其腦髓畢竟一なり、今玆に之を詳説するの必要あらざるなり、其二を

失望者　とす、自家が志望成らず、企計雲煙の如く消えて漠々、進みて前に躓き、退きて後に倒る、天地黯々として、一條の光線なく、風凄々として腥く、氣陰々として冷かに、死の谷を歩むが如く魑魅の穴に入るに似たり、

夫の日野の山奥に、僅かに膝を容るべき、方丈の廬を結びて

世の人の呼吸の音を避け、天地乾坤をうたかたの世なりけりと觀ぜし人はいふめり、

春は藤波を見る、紫雲の如くして西の方に匂ふ、夏は時鳥をきゝ、語ふ毎に死出の山路を契る、秋は日ぐらしの聲耳に充てり、空蟬の世を悲しむときこゆ、冬は雪を憐れむ、積り消ゆるさま、罪障に喩へつ可し、

噫悲哀の述懷、豈斷腸の感なしとせんや、然れども吾人は倘ほ戀愛の囹圄に押しこめられたる、一種の奴隷により、數多の事實を試驗臺に捧げらるゝ也、

文覺が袈裟に於ける、ダンテがビートリスに於ける、彼等は

頓語菩提、極救陀羅禪悟穩、脫離汚穢道心清、

浮雲はふもとのかたに分けすてゝ
はれし高根の月を見るかな

然りと雖も、其の冷々たる、熱なきがためには非る也、其の默々たる、意ひなきがためには非る也、君看ずや、堆々たる火山の熔和所は、昔し燃えたる熱火の働きを示す者なるを、吾儕は益彼等が如何に多血にして、又如何に熱せし歟を確信するものなり、

あゝ澤邊の鴫の羽がきに胸板を打ち破り、池畔の蛙の水音に鼓膜を毀ち傷けたる、衷心如何に苦悶せしぞ、人は云ふ彼等は悟道せりと、或は然らん、然れども安んぞ知らん、其聲は大失望、大絕望の反響なりしを、

吾儕は實に此種のペルソンに向て大方ならず、同情を表せんと欲するに吝からざる也、何となれば彼等は人生の眞面目を表現するの活劇を演ずれば也、其の聲は肺肝より出で、鏘然たれば也、

眞淵其半身を喪ふや歌て曰く、

我がのちをたのみし人はさきだちて
ふりにける身をいかにしてまし

妹が門いでゝいる毎にはや行て
はやかへりことといひし人はも

讀者若しよく翫味咀嚼せば則ち、靈氣の悚々人を襲ふを感得するあるべし、山人かつて「亡き妻」の一篇を草し、友人をして私かに半身ありしを疑はしめたりき、蓋し友人の情緖に擊たれたればなり、

◎◎◎◎◎◎

弄世的旅行者　是れ第二種に屬する者也、其人事に無頓着な

る留守居の比丘が無縁の石碑に於けるが如く、其飄輕なる痴蝶が栞花に戯るゝに似たり、吾人之を彌次と北八に見る、街頭人あり頭に手拭を被ひ、三絃を彈き、亂調子に俗歌を唱し、笑ひを鬻ぐ、醉漢傍を過ぎ和して曰く、

何をくよ〳〵川端柳

あゝ是れ果して何等の反響ぞ、

山人以爲へらく、第一、第二の兩種は恰も悲壯劇（トラゼディー）と滑稽劇（コメディー）の如しど、果して然りとせんか、山人之をロッチェにきく、

其の根本より考ふれば、悲壯劇も滑稽劇も同じ目的を持てる者にして、乃ち天道を踏み、世綱に從はんとするや、必ず壞滅を免れざるは、有限性の一般に有する、心理の弱點なるを共に表現するものとす、唯だ悲壯劇に於ては偉大或は才幹ある人物が時を費やして、企圖せし計畫を、世界の大勢力によりて、打破せらるゝとを現示し、滑稽劇に於ては、瑣屑なる小謀を抱ける剽輕漢が、通常の人事に崩壞せらるゝさまを表現するをもて、異れりとなす也、

夫の厭世、弄世の徒亦是に異らず、

大哲學者はいへり、我は忙々焉として勉めたり、而して何をもなさずして我か生を費せりと、大帝はいへり、我は凡ての事を試みたり、然れども利せし所果して底事ぞと、ゲエーテはいへり、其の生涯は常に轉々たる丘上の石の如しと、然れどもパウルはいへり、我は善き戰ひを戰ひたり、既でに馳すべき路程を盡したり、今より後、義の冕冠我が爲めに備へありと、あゝ孰れか是、孰れか非、

吾人はすでに、悲壯劇と滑稽劇の關係天壤にあらず、否な同一の目的を有する親密の同胞なるを知了せり、要するに二者相共に反目するものにあらずして、袂を列ねて同一の舞臺に躍る者たるを知らば則ち、之を稱して悲歡劇といふ、果して誤らずとせば則ち、

厭世的樂天旅行者なる第三種の人物に接すべき也、ロングフエラウかつて歌へらく、

雲のあなたは日こそ匂はめ

然り漠々たる陰雲凝りて雨となり、綢繆するに暇なく、我が窓を打つも、靈眼を驅りて雲上を望見せば、赫灼たる日光我を射て眼應さに眩すべきなり、山人靖節が歸去來の辭を想起

するや、毎ねに彼が未だバプテスマを領けざる大クリスチアンたるの幻影躍如として、眼前に活動するを見る也、

土佐日記十二月廿七日のくだりに

かくするうちに、京にて生れしをんな子、こゝにして、俄かに失せにしかば、此頃のいで立ち急ぎを見れど、何事もえ言はず、京へかへるに、女子のなきのみぞ悲しみこふる、ある人々もえ堪へず、此間にある人のかきて出せる歌

都へとおもふも物の悲しきは
　　かへらぬ人のあればなりけり

またある時には、

有るものと忘れつゝ猶はなき人を
　　いづらと問ふぞかなしかりける

あゝ何等の悲調ぞ、然れど信仰の書にはいふ、

信仰によりてアブラハムは異邦に在るが如く、約束の地に寓どり、同じ約束を相つげ。イサク、ヤコブと共に幕屋に居れり、予は神の造り營める所の、基ある京城を望めばなり、………此等は皆な信仰を懷きて死ねり、未だ約束の者を受けざりしが、遙かに之を望みて喜び、地に在りては自ら賓旅なり、寄留者なりといへり、(來十一〇)

何ぞ其の洋々として和氣滿ち、靄々として春意の盛んなるや彼の信仰なき旅行者を觀るに、恰も冬枯の林に痩せ衰へたる樵夫の木を伐つが如く、此の信仰ある旅行者は、恰も新婦が新郎と手を列ねて、春の野の雪間を分けて、若菜を摘むに似たり、

イスラエルの歌仙歌つて曰く、

爾の律法は我が旅の家にて我が歌となれり、

然り、チー主よ、爾の聖言は我が足の燈火、我が路の光也、

正直のこうべに神やどる、正直は實に最良の策畧なりとは古今の金言なり、然れども此心を以て爲す人は正直にあらず。

批評

○デビニテー　撫象子

松村介石君の著とす。其序に云く、デビニテーは、隱士が近來自得の道也と。

僅かに、百十頁の小冊子なりと雖ども、自修鍛錬の結果にして、筆を下す一々產の苦を經たり、此書決して、尋常の著作にあらず。

先づ、讀者に告ぐ、此書を讀むは、情に於てすべし、文に於てす可らず、感に於てすべし、理に於てす可らず。若し、同情の想を以て之を讀下さずんば、理義一般の著作としては、左したる特色あるものにはあらじ。

余は、其理義に於て多くの同意しがたき箇所あるを發見したり。然れども、其情感に至ては胸を掬つて、著者に賛同するもの少なしとせず。余は、著者の意氣に投合す、其哲學論、神學論に至ては、不幸にして合わじ、左れど、此書に對して言ふときは、寧ろ此等の事を辨ずるに遑あらず。

序に云く、莫遮、隱士は平然たり淡然たり此書を讀むと讀まざるとは固より人の自由なり云々。卷末結尾に云く、快哉快哉予已にデビニテーの峰頭に在り雷電風雨空しく脚底の迷界に動くと。此等世に關せずとするの壯語は、即はち大ひに世に關するの情を形わす。烈火を抑へ、熱情を矯め、强ひて凡俗と離れんとするは、凡俗を憫れむに奚れぞ。余は、隱士が寧しろ、世人の多く此書を讀まんとを欲すと言ふを高しとするもの也。

○天啓教と聖書

神學博士フィッヨル氏の著「天啓の性質及方法」中より、一章を拔き、横井時雄氏が譯出せられたるもの也。此章のみにては、未だ天啓の意義を十分明了せしむると能はずと云へども、聖書の價値を論證する所に於て、一二面白き說明あり。

○新編中等唱歌（奥好義氏編）

樂譜を撰むに心を用ひ、今代諸名家の歌を撰むに頗る親切なる跡見えたり、歌趣幽玄の美を歌ひしもの往々にして見ゆ、此唱歌書殊に意を用ひしは、歌詞の書を女子習字に心を摧かれたる岡田起作氏の筆に成りたる事なり、之れ習字の手本にも直ちに應用せしめんとての親切を籠めし價あり。

○和文學史（大和田氏著）次號に掲載すべし

○小說諸類（到來累積す）文學界及び當誌上にて追々評すべし

閑書

閣龍世界博覽會の費用並に其の財源

同博覽會が本年五月一日其の開會を見るに至るまでの費用は大抵三千万弗以上にも達すべし、今左に其の大要を掲ぐ。

支出費用（錢以下略す）

臨時部	九十万六百七十五弗
建築部	一千五百五十一万九千六百九十二弗
其他各部	二百七十万三千二百六十二弗

各部の內譯は、事務委員、書記、會計、等より農工業、製造美術等に至るまで凡そ三十部に渉る

總計　一千八百三十一万三千六百二十五弗

此の內費用の尤も大なるものは建築部にして其の半額以上を以て二十八棟の莊大なる建築をなすへしと、材料は鐵剛鐵煉岩石木材を用ゆるの外天井に玻璃と巴里製の漆灰と用ゐたれは透明なる玻璃と白色なる漆灰と相映し、場內を歩むものも雲ある大空の下にあるが如く、物品は恰も空中に懸かるが如くならんと想像するものあり。

今左に二十八棟の建築の廣サ並に其の價を擧くへし、其の大なるものは三十エークル半に及ぶ蓋し一棟にて斯く廣大なるもの世界に比類なし。

建築物	エークル	價額
製造並に技術部	三十、四八	百六十万弗
器械及び蒸溜室	十五、七七	百十七万五千弗
農業部	十三、四二	六十九万弗
電氣部	五、九六	四十三万弗
礦山部	五、六四	二十六万五千弗
美術館	五、一二	七十六万弗
園藝部	五、一一	二十九万弗
運輸部	十五、五	三十二万弗
漁業部	二、三四	二十二万四千弗
建築裝飾室	二、二七	三十三万五千弗
森林部	二、五二	八万弗
婦人部	一、八四	十三万八千弗
圓柱石碑		十万弗
休憩室		十万弗
入口		七万五千弗
警察室醫員室等		十二万九千三十六弗
古寺院雛形		五万弗
事務員室	一、二七	四十八万弗
牛乳貯藏所	、四五	三万弗
ポンプ室	、一四	三万弗
鋸木所	、二五	三万五千弗
石炭石油室	、二五	一万五千弗
家畜小屋	二十五、	二十一万弗
家畜園	二、八五	十万弗
音樂室	、五	一万弗
公園外巡査屯集所	、二五	四万五千弗
公園內巡査屯集所		七万五千弗
工具室	、七五	三万弗
荷物室	、七五	一万九千六百六十弗
徵稅所		二万五千弗
講壇其他		十七万八千弗
伶樂室		十万弗
化粧室		一万五千弗
レーキ、フロントの美術堂		二十万弗
裝飾費用		六十万六千弗

右總計　八百九十五万六千五百九十六弗　（一エークルは千二百二十四坪餘なり）

此の外左に掲ぐるものは建築に關して要用なるものにして其の費用も漠大なり。

第一　地均しの費用、博覽會の設立さるゝ地は廣サ三百六十三エークルにして、湖水に沿ひ長サ一哩半幅一哩三分の二より三分の一に至る、其の地高低定りなき砂地なり、湖水は半哩を隔てゝ二ヶ處に於て陸地に侵入し其の一ッ一島あり、是れ則ち日本建築の建てらるゝ處なり、島には道路あり茶亭あり、之れに達するに橋あり舟を以てする渡し場あり、斯くの如き地なるを以て之を地均し規律を立つるが爲めに要する費用大なり。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

第二　船渠の費用、湖水より船にて入り來るもの、なるに船渠を備へざるべからず。
第三　光線と溫熱とを與ふるの器械。
第四　水道、下水、消毒、防火、等に要する費用。
此れ等の費用を合算すれば殆んど建築物と同樣なる巨額に達し、合計前記の一千五百五十一万九千六百九十二弗に及ぶ。
右に掲げしものは盡く閣龍世界博覧會々社の支出にかゝるものにして此の社に長たりしものはライマン、ゲーシ氏ウイリアム、ベーカー氏ヘロー、ヒツギンボサム氏なり。次に政府に於ても委員を撰定し、委員長にトーマス、パーマー氏監督長にジヨージ、デビス氏任ぜられしが尙ほ婦人の委員をも設けんとの事にてベルサ、パーマー夫人委員長の任に當れり。
委員の給料其他の雜費は皆國會にて認可せしものにして、其他政府の出品物の費も同樣國會の認可せしものなり、其の費用百六十四万三千五百弗に達せり。此の外昨年九月までに合衆國地方の各州より其の出品者の爲めに費したる金額三百四十四万一千弗なり、今是れ等を合すれば左の如し。

一千八百二十二万二千九百五十四弗	閣龍世界博覧會々社の支出
百六十四万三千五百弗	合衆國政府の支出
三百四十四万一千弗	各州支出
五百九十三万六千六十三弗	外國支出
總計　二千九百二十四万三千五百十七弗	

此の外特許を得て地面を借用するものゝ費用百万弗、內部の鐵道費用六十万弗、湖水の運送船三十万弗を要す。
されど之れ實に大躰の費用にして只僅かに博覧會の形を成さしめたるに過きす、一個人としての出品人幷に見物人の費用等は勿論此の計算に入らす、而して本年五月一日の開會より百八十四日間開會中の費用は二百五十万弗に達すへしと。
閣龍世界博覧會會社は一株十弗つゝを以て百万株の資本を有せり即ち一千万弗なり株主にして少きは一株多きは一万五千株を有するものあり、此の資本金は五百五十万弗の利潤ある見込なりと、而して合衆國政府は博覧會の爲め特に半弗の貨幣五百万個を鑄れり即ち二百五十万弗なり、此の貨幣の値一個一弗に騰貴し其の總額は五百万弗に値するに至れり。博覧會々社は建築中二十五錢の入場券を賣りて之を縱覽せしむ此れより出つる利潤五十万弗幷に前記資本の銀行より與ふる利金三万弗あり、今之を合算すれは次の如し。

五百五十万弗	株金
四百八十九万三千七百五十弗	シカゴ府の支出金
二百五十万弗	政府の補助金
二百五十万弗	右金の利息
五十万弗	入場券の利金
三万弗	銀行よりの利息
總計　一千五百九十二万三千七百五十弗	

今此の金額を以て合衆國各州其他外國より支出する金額一千百〇二万〇五百六十三圓と合すれは、二千六百九十四万四千三百十三弗の巨額を得るなり、此の金額は彼の三千万弗に近き總費用に對して少からさるべし。今少しく計算を變へて彼の會社の受持金額千八百二十二万二千九百五十四弗の費用を會社の資本千五百九十二万三千七百五十弗を以て支拂はんか爰に二百三十万弗の不足を生ずべし、然れとも更に左に掲くる如き財源を得るなり。

一千二百五十万弗	入場券收入金
四百八十万弗	場內に商賣せんとするものゝ特許金
百三十万弗	閉會後殘物の利潤
總計　一千八百六十万弗	

此の內より博覧會開會中の費用二百五十万弗を差し引かは即はち一千六百十万弗なり。
若し斯くの如くなれば二百三十万弗の不足を引きて猶一千三百八十万弗を得べし之を會社の一株に配當すれば即ち一弗三八を得之れ即ち純益金なり。然れども雛鄕を以て雛をトすべからす林中なる二匹の鳥は手の中の一匹に如かず、斯く都合好き計算を得るや否や未だ知るへからさるなり。
是より此の閣龍世界博覧會を以て之より以前にありし二大博覧會に比較せん、即ち一つは千八百七十六年フヰラデルフヰアにありしもの、他は千八百八十六年巴里にありしものなり。

先づ面積を以て始めん、フ井府二百八十四エークル四〇、巴里二百三十八エークル、合計五百二十二エークル、閣龍六百三十三エークル即ち前二名合計の一陪と五分の一に當る
建築の面積フ井府七十エークル〇八、巴里七十五エークル五〇、各計百四十五エークル五八、閣龍百五十エークル、合計より多し。
建築の數、フ井府二十三、巴里五、閣龍二十八、合計に同じ建築及び地所の價、フ井府五百十八万九千八百二十八弗、巴里三百九十万三千七百六十弗、合計九百〇九万三千五百八十八弗、閣龍千六百五十一万九千六百九十二弗、合計より四分の三多し。
入塲券よりの收入金、フ井府三百八十一万三千七百二十四弗巴里九百九十万弗、合計千三百七十一万三千七百二十四弗、閣龍は未だ知る能はざるも豫定せし處に依れば千二百二十五万弗なり、即ち合計より十分の一少し。
見物人フ井府九百九十一万〇九百六十六名、巴里二千八百十四万九千三百五十三名閣龍は之れ亦未定なれども入塲券を五十錢とし前記の金額を除すれば其の人員二千五百万なり毀用、フ井府は未詳、巴里は八百三十万弗、閣龍は三千二百七十四万三千五百十七弗にして巴里の四陪に當る。
尚此の閣龍博覽會の莊大なるを示さん爲めに左に一二の比較を擧ぐ、即ち豫定の見物人を二千五百万人とすれば恰も千八百五十三年に於ける合衆國の全人員の數に等し、次に會社政府各州外國等より支出する金額を三千万弗となし、一個人の出品者（其の數六万人と豫定せり）が費す處を同額と定むれば合計六千万弗に達す、之を見物人の數に分配すれば一人に付二弗四十錢に當る、即ち見物人は五十錢の入塲券を拂ひ二弗五十錢の招待を受けたるなり。
六千万弗の金貨に巨額なり、ミチカン湖水を引きてイリノイ州に入れミスシッピー河に流れしむる運河を開くの費用に三陪し、大平洋と大西洋を連絡せしむるニカラガ運河の費用の半ばより多し、之を合衆國の總人口に分てば一人一圓づゝを得べくシカゴの市民に分てば一人五十錢づゝを得べし。

寄書

臆病者の十難、勇者の十徳　甲州　蓑業子

古き寫本を開き見しに、源義家の語を錄せるあり、面白く感ずるまゝ、貴社に寄す。

源義家曰く、他の非を語るは、臆病第一の者の必ずあるとなり。十種の難あり。一には、敵を欺く。二には、詞多し。三には、能く他の非を曰ふ。四には、日夜のへだてなし。五には、陣中不潔なり。六には、諸の勝負を好む。七には、神佛の像を敬はず。八には、主人傍輩に不禮なり。九には、弓箭にうとし。十には、兩眼指出てうろつくものなり。又曰く、勇者に十の徳あり、一に、敵を欺かず。二に、詞すくなし。三に、他の非を語らず。四には、日夜へだてなく用心す。五には、陣中不淨ならず。六には、勝負を好まず。七には、神佛をよく敬ふ。八には、人に禮義ふかし。九には、弓箭よくなしなむ。十には、眼ちいさく底に沈む。此十徳は、皇家武將の最上たからなり。

片々

可愛子編

●銀坐會館の青年會演說　は去る二十一日午後六時半より、辯士は松村介石氏、演題は「今は寐より醒むべき時なり」にて、有益の會なりしといふ。

●東京基督敎青年會講演　は去る二十二日午後二時より、辯士は松村石介氏なりしといふ。

●群馬靑年團體の廢娼運動　群馬青年團體は本年の帝國議會に向て、廢娼の建議を爲さんとて、石島良三郎、宮前右太郎二氏、先頃出京して運動中なりと。

●小學福音青年會　北海道後志小樽なる同會は、每月第一火曜日を以て公開演說會の例日と定めたり、該會は一の福音會として、何の宗派にも屬せず、獨立獨步社會矯風を以て目的とせしが、運動上の都合により、先頃全く美以敎會保護の下に屬し、爾來入會者日を追ふて增加し、今は既に三十餘名に上れり、尙偏く其主義目的を發表し、廣く會員を募集せん爲め、遊說員を設け、又機關雜誌を發兌せんと決し、大に氣焰を吐かんとする由。

●山梨縣通信

◎廢娼建議　は其儘握り殺しとなりたり、議員の多くは活氣に乏しく、甚しきは遊廓に宿し、曉に車を飛ばして歸り來り、直に議場に臨むが如き輩もあり、遊廓にては、存娼の爲めに盡力して貰はんとて、頗る議員を厚遇するが故に、之が爲めに籠絡せらるゝ腐腸の徒もありと、是に於て廢娼義會の諸氏は慷慨計畫する所あり、愈々益々主義の爲めに盡さんとす。

◎山梨基督敎靑年會　未だ著るしき運動をもなさず、されど青年の中、大に自ら任じて縣下精神的革命の爲めに盡さんとし、陰かに修養する者あり、思ふに將來は有望ならん。

●愛知縣三河國通信

◎遊廓移轉の建議案　は、舊臘の愛知縣會にて可決せられたり、而して此事たる、知事に於ても認可するとならんといふ、抑も三河國豐橋は、人口一万五六千もあらん、而して遊女の數は五百人足らずあり、遊廓は民家と軒を並べて町の要處に散在せり、斯の如くなれば、風俗實に好ましからぬものあり、いよ〳〵移轉さならば、多分郊外の高志原といふ地に移さるゝならんとの噂。

●丹後通信

◎川上青年研智會　丹後國熊野郡なる同會は、本年一月第一日曜日より、春期日曜學會といへるを開設し、尋常科を終へ、其儘絕學の姿なる兒童六十餘名の爲智識の應用、新智識の開發を計れり、講師は小學敎員及び先進の士に托し、給資は村の負擔とし、當時積雪壓を沒すと雖も、哩餘の地より、朝暾高く上る頃校に上り、歸鴉塒に伸る頃歸宅す、而して同會は之に滿足せず、本冬期より來春に掛け、冬期學校を立て、他より良師を雇ひ入れ、目下其運動手段中なりとぞ。

◎女子談話會　は川上靑年會の主唱により、昨年成立し、會員既に十數名、追々進步の見込ありと。

●長崎縣通信

◎長崎縣南松浦郡福江村に昨年五月研魂會てふ靑年團體組織なりたるが、爾來日を逐ふて益々盛大を極め、十月に至りては每月一回雜誌を發行するに至れり、今其規則を摘要すれば左の如し、而して目下會長には澤本龜太郎氏幹事には富田清助氏、川崎佐二郎氏、編輯員には富田淸助氏就任し居れり。

研魂會規則

第一條　本會ハ研魂會ト稱シ事務所ヲ長崎縣南松浦郡福江村六百七十八番戶ニ置ク

第二條　本會ハ友誼ヲ厚クシ智識ヲ交換シ學術ヲ研磨スルヲ以テ目的トシ每月一回研魂ト云ヘル雜誌ヲ發行ス

第三條　本會ニ入會セント欲シ幷ニ現會員ニシテ退會セント欲スル者ハ其旨幹事ニ屆出ヅベシ

第四條　每月二回通常會ヲ開キ會員ノ演說幷ニ討論ヲナスモノトス

第五條　本會ニハ會長一名幹事二名編輯員一名ヲ撰擧シ會務ヲ處辨セシムル者トス

第六條　或ル一村內ニ於テ會員五名以上集ルトキハ共會員中ノ事務ヲ採務セシメンガ爲メ會長見込ヲ以テ理事若干名ヲ設ケ一ツノ支部ヲ設置スルモノトス

第七條　何人ト雖モ雜誌ニ掲載スル爲メ其自作ノ詩歌文章ヲ編輯員ニ差出スヿヲ得ルモノトス

第八條　寄稿ハ凡テ界紙ニ二十三字詰ニ淨書スベシ

第九條　雜誌見本ヲ要セバ郵券七錢ヲ送附スベシ

第十條　會費ハ一ヶ月六錢トス但郵劵代用ヲ許ス

第十一條　會費納付季限ハ凡テ其前月三十日迄トス

第十二條　別ニ會員十名以上勸誘スルカ或ハ一時ニ金一圓五十錢以上寄附スルモノハ無會費ニテ每號雜誌一部宛ヲ呈送スルモノトス

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

らで、滑らかに平流して尋常住家の間々の低原に流入せざる可らず、こゝに至りて初めて人世日常の實用に適使せらるゝを得るなりと。ルッソゥが奇想天外より落下し、久しく平板滑流したる后ちにあらざれば、未だ俄かに、ペスタロッヂ、フレーベルとなること能わざりし也。されど、ペスタロッヂ、フレーベル、の一流皆な、ルッソゥより淵源す、啻に之のみならず、スペンサー一派の「ネーチュア」を唱道するもの皆なこゝに由來せざるはなし。

（六、）佛國の革命史を繙さくに當りて絶大痛快の兩偉人に接す、ボルテーア、ジン、ジャック、ルッサウと是なり。更に、「モルレー」がルッサウ傳を繙さくに至ては、この第二の偉人が性格經歴の尋常ならざるに喫驚せずんばあらず。彼は年少に當りて多くの罪過を犯しぬ、左れど或時には亦た殆んど、聖に近く、隱密なる私行に於て或時は大勇士となり、又或時は尤も憶病なる人となりぬ、あらゆる山を試み又あらゆる商賣を營みたり。工夫ともなりぬ、奴僕ともなりぬ、藪醫者となりぬ、先生ともなりぬ、或時は巍々たる大廈高樓に住ひぬ、又或時は第一層の小室に入り麵包一片も實に價高き哉と歎じたりける。要するに彼が精神は斯る變化の間に脩煉されたり、彼が感情は斯る轉變の間に激烈となりぬ。而して后ち、民約論及び、エミールのジャン、ジャック、ルッソウとはなりぬ、彼は幼なき時より既に非常過感の子なりき、終夜泣て床を潤ほせしこともありき、其懺悔の記に云く、余は之と云へる定まりたる觀念を有たざりき、然れども既にあらゆる感情を經験したり、余は何事をも確認（コーシーブ）せざりき、左れど万事を感（ピール）したりと。少ふして、プルタークの集傳を讀み、共和政と民主政とを夢寐戀想し、公平を過度に慕ひ、欺僞を最上に恐怖したり、熱情、世の不公平を憤ふり、更に貴族僧侶が人民の上に於ける壓制に烈怒したり、嘗てパリよりリチンに至るの途中、人民塗炭に苦むの慘情を掲けるが如き狀態を歷々實觀し胸中の不平不滿絶頂に達し號泣絶叫して心裏既に后年の著書の大半を感じたりき。彼が性格經歷大率れ、此の類なり。

二段　エミール

（一、）ルッソゥが世に著名となりたるは、嘗て一の懸賞論文を草したるときにありき、其文の主意下の如し、云く、凡そ文明なるものは人世の大毒なり、惣ての工藝、惣ての制度皆な悉く有害なり、故に惣て之等を全却し、「ネイチュア」の太古に反らずば、人世遂に幸福あるとなし、この「ネイチュア」を Noble Nature と云ふ、人類些々たる發明を爲して之に誇る、左れど先づ此の發明を悉く棄べし、斯て初めて幸ひとならん、人は嘗て幸福なるものにてありき、左れど今は憫れむべきものとなりぬ、故に從來其施行したる万事を廢すべし、斯て初めて復た歸元せんと。ルッソゥは此の意見を直ちに教育の事に應用し、現今の教育制度を悉く全廢し、この意見を以て理想架空的に快筆を一走せしめたるもの即はち「エミール」なり。

（二、）エミールの世に出しときは、西歷一千七百六十二年にてありき、（ルッソウ一七一二に生れ、一七七八に死す、此時五十一才）此時パアメリアントは布告して、ゼスイト派僧侶を佛國より追放したり。エミールは當時の僧侶を斥けんとて強て執筆されたるものにあらず、寧ろ將來の人類の爲めに希望を述たるものなり、全局に貫ぬける一道の活火熱血は帋面に溢れ迸ばしる、其躰は半ば小說の如く、又の半ばは論文の如し、教育學上に於ける人の思想の最大紀念碑なり。カムペーアも曰く、エミールは純然たる解辨の論にもあらず、又單に實際の教育術を說きたるにもあらず、蓋し一の教育系統を概說し心理上及道德脩煉上に一論文を呈し人間の性質を尤も深切に分解したるものなりと。

（三、）エミール全篇の大主旨は何ぞ、其開卷破頭に左の嚴格なる告白あり云く。

万物は其造物主の手より出でたるとき善好なり、人の中に入るに及びて万物墜落したり、

一派の厭世家は云ひぬ、小供は生れ乍ら悪性を遺傳し天然墜落して誕生すと。エミールは此の僻見を打破せんとを欲したり、幸にして之を打破したり、然れども更に其極論に走り、凡そ人の性は生れ乍ら一の悪質を混せず純善純清なりと言へり、これ亦第二の誤謬に陷ひりたるものなり、エミールは又云く、社會は奸悪なり、腐敗せり、人世の罪悪は皆な社會あるより來る、人の墜落するも亦之よりなり、故に純清純善なる人の子の性質を斯る腐敗の感化より保護せざる可らずと、左れとこれも亦誤なき能はず、社會は蓋し腐敗しつらん、然れども、如此く腐敗せしむる所の元因は何處にありや、社會其自身漠然として腐敗せる乎、社會とは人の集合なり、果して一個人もし無罪淸貞ならば社會何をもて腐敗すべき、故に單に社會に罪を歸して一個人を無罪なりとするは更に第二の誤謬に陷りたるものなり。エ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ミールは自然を純清純眞なるものとなしぬ、故に人の子の十二才に至る迄は全く之を放任して譬へは野蠻人が綠林鬱樹の間に逍遙したるが如くならしむべしと云へり。又云く、凡そ人生は何れの年代、何れの階段を問はず、皆な其の相應せる完熟を有し、その年代當然の格を存す、世人屢ば言ふ、一個人成長せりと、左れど、エ、マンが成人するに非ず、エ、チャイルド、が成長するなりと。この見解尤も可なり。彼の教育を常に準備の如くにし、何れの時代に於ても只だ將來の爲にのみ用意して絕へて直接の實用を思はざるは頗ふる不可なり。又云く、今の人は幼兒を知らず、誤りたる觀念を以て幼兒を見る、其觀念の長ずるに隨て誤過イヨ〳〵多し、今の學者、たゞ成人を見て幼兒を見ず、幼兒の中に成人の姿を探せんとして、直ちに幼兒そのものゝ性質を思察せずと。この言亦尤も可なり。エミール、大躰の主旨は此如きものなり、この主旨を發揮せんが爲に、エミールと云へる一個想像の小兒を造り出し、これが父母を言はず、たゞ社會より遠隔せる片田舍に於て或る一教師が之を保護監督するの狀態にて新教育法の精神を表白せり。エミールを讀むものは理論を以て讀む可らず、寧ろ想像を以て讀む可し。ルッソウ、現に自ら序して云く、

凡そ此書を讀ん人は、教育學上の一論書を讀めりと信ずるよりも寧ろ一想像家の一幻想を讀みつゝありと信ずるなる可しと、

余は、左に、エミール、の大躰を指摘す可し、教育學上のこの驚ろく可き著書は、何人も必らず其一斑を承知せざる可らず。

(四)、エミールは、全通徹貫せる一道の活火熱血なり、之を分々別々として見る可きにあらず、左れど、エミールが年代の進步に隨て之を分ち、亦自ら劃すべき階段なきにあらず。初の二卷は、エミールが十二才に至る迄の幼年時代を寫し、專ら身躰及感覺の發達を記す、第三卷は十二才より十五才に至る智育の年代の爲に記す、第四卷は十五才より二十才に至る德育の年代を記す、最后の第五卷は二十才后の爲に記し兼て女子教育の事を論ず。

(五)、最初の二卷には之と云ふ定りたる教育法を記さず、如此きは皆な第三卷、十二才以后より初まるものとなしぬ。十二才に至る迄には、何如に走る可きか、何如に飛ぶべきか、何如に隔離せるなどの事を知り居ることを要し、其他の万事には全く無智識なるを相應なりとせり。即はち、十二才に至る迄は何事にも學問することなし、其右の手と左の手との相違をも學びて知ることなし、要するに、十二才に至る迄は、たゞ其の躰力及感覺を發達するのみなり、此の二卷の中に多くの謬見僻論あるは免れずと雖も、其中亦尤も尊む可き秀論少なからず、左に其注意す可き條說を拔摘列擧す可し。

(六)、自然をして取締たらしめよ。

ネイチウア(自然)は子供が運動の自由を有することを望み、その四肢の活動を何物も決して妨ぐまじきことを要む。然るに、吾等平常何如になす。衣服を狹くして、その內に子供を囚牢す。子供は此の過緊なる衣服によりて片環となる。人は其后多くの壓制を受けざる可らざるものなり。而して其壓制の第一は、緊り過ぎたる衣服の上の壓制なりと。この爲めに、ルッソウは例の罵嘲を與へて曰く、世人は蓋し子供が快活に見ゆるを好ましからずとなすならん、人は奴隷の狀態に生れ、生き、且つ死するものか、其生るゝや、スワッドリング、クロウス(まき布)に包まれ、其死するや棺の內に釘打たる、而して人の形を取りて其世に存らふる間は、亦社會の制度によりて捕獲せらると。

蓋し、現時の取扱方は、子供の活動を妨ぐる所多し、此は固より改めざる可らず、左れど、ルッソウが言へる如く、亦其極端に走り、全く自然に放任して、子供の隨意に任すべきにあらず、人長じて、社會を爲す時も、その制度を嚴酷にす可らざると共に亦全く之を放任すべきにあらず、多少の取締はなかる可らず、此如く子供の取締に於ても勢ほひ多少の取締を以て亂暴に流れ易き活動を幾分か制裁せざる可らず。今の取扱は寧ろ酷に過ぐ、ルッソウは即はち之に慣ふるものなり。左れど、之に慣ふるによりて、亦た一端の極に走る可らず。

(七)、母をして親から其子を育養せしめよ。

前述せる如き極端に走らんとすると同時に、ルッソウは亦驚ろく可き名言を吐けり、殆んど矛盾せるに似て、實はこれ「ルッソウ」が本色なり、何んとなれば、彼は弱屈に難論するものに非ず、たゞ直感直覺するまゝを述るものなればなり。彼は云く子供は保姆に托す可らず、その母直ちに之を乳養せざる可らずと。則はち曰く、母なき所には子供なく、又母なき所には家族なしと (Where there is no mother, there is no child; where there is no mother, there is no family.) 斯て曰く、左れば人々をして其初めの義務に立反らしめよ、先づ母をして其子を養はし

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

めよ、何加に絶大なる變化を世表に呈す可きか、汝は之を見て喫驚す可しと。母が直接に其子を乳養するの利益数々あり。左れど、ルツソウが尤とも主張する所のものは、之れ啻に子供の爲の健全なるのみならず、實に之れ家族の徳なり道徳なりホームの尊貴なりと云ふにあり。而してこの最始の義務を盡すと行れなば、其后の多くの事務何如に容易すく行るべきかと歎しぬ。この一段は、容赦なく受入る可き名説なり。

（八、）自然によりて身躰を健全強固にする事、

ルツソウは、自然によりて身躰を發育し健康にせしめんとす、故に、エミールは初より何如に耐ゆべきか、何如に苦む可きかを覺り、直接に自然の影響を蒙りて其感化を在のまゝに受けたり。エミールは彼「ダーチセチス」の如く跣足にして履を穿たず、ロツクは其徒弟に發き靴を穿たしめしが、ルツソウは、即はち之をすら興へず、云く自然には靴なし、人は跣足なり、靴は后代に至て人の發明せしものなりと。この故に、エミールは亦暗黒裏を光明なしに獨行せり、何んとなれば蠟燭も亦后代の發明にして自然に存せざるものなればなり、云く、エミールは蠟燭屋の店に於て光明を得んよりも、其指の先にて光明を得んと。蓋し指を以て觸れて道を見出すとを云ふなり。又、エミールは種痘せず、種痘も亦た人の后代の發明なれば也。薬を服用せず、醫師を招かず、たゞ死に瀕するに至て醫師の力を頼む。又通常世に行はるゝが如き赤子を酒の中にて洗ふとを不可とせり、何んとなれば酒は泡醸せしものにて自然になきものなればなり。又、人の手にて造りたる「をもちや」は不可なり、之れ自然に存せざるものなればなり。樹の枝、又は罌粟の頭にて十分なりと、

自然に隨はんとするの極度如此き極端に走る、如此き教育はこれ人を野蠻人の昔に反らしむるなり、多くの發明品は人の造るものなりと云へども、亦人が「自然」の教養を受たる結果に過ぎず即はち亦第二の「自然」なり。この第二の「自然」を頼まずして、一々太古初元の「自然」の如きものに立歸らしめんとするは、文明を一々根こぎにし、喬木を悉く一歳枯れの灌木となすに異ならず、人世の進歩遂に望む可らざるなり。左れど、其實の過激極端なるに關はらず、多くの眞理を含む、通俗の教育に子供を屋外に出さず直接に自然に觸れしめず、但だ器械的の世界にのみ竄居せしめんとするの大弊を破るが爲には、亦この痛快の議論を要するなり。

（九、）教へざるの教育即ち、ネガチーブ、エヂユケイシヨン十二才に至る教育は、教授するにあらずして放任するなり、即はち「ネガチーブ」の教育なり、エミールを監督する教師は何事をも教ゆるとなく、只だ「エミール」が自ら學ぶの世話を爲すのみ、之をして自ら發明せしむるの準備を爲すのみなり。故に云く、汝が子弟に口づから教科を教ゆるなかれ、たゞ經驗によれる外何ものをも承知せしむるなかれ、教育に尤も大切、尤も有要なる規則は時を益せんとするにあらず、時を損せんとするなり、Is not to gain time, but to lose it. 又云く子弟が自ら瞭解し得べき區域の内に問題を置き、彼をして自ら解釋せしめよ、之に教へたるが故に知らしむるとなかれ、たゞ自から悟りたるが故に知らしめよと。又云く、一日に百回倒れしむるとも可なり、多きほど更に可なり、何となれば、彼は之によりて彌よ自ら扶持するの法を悟るが故也、之を自由にすれば、更に大なる傷を蒙るべき恐を償ふべしと。

この説は「スペンサー」が切りに唱和する所にして、多くの眞理を存す、全く放任すべからずと云へども、放任せしと同様の自由を成べく多く之に得せしめて以て万事を自ら學び、自ら悟らしむるやふに取扱はざる可らず。故にこの一段の説に至ては多く服膺すべき眞理を存するなり、

（十、）子供は幸福を享受すべし。

子供を尊重すべし、子供は子供たる一個人なり。其幸福を得せしむべし、其需むる所を受けしむべしと。これ「ルツソウ」が尤とも強く主張する所ろたり。云く、子供を愛せよ、その遊戯を勵ませ、其娯樂、其の幸福を覓むるの天性を勵ませ、諸君何んぞ彼の脣に笑あり魂常に平和なりける彼の幼時の事を追懷して坐ろに之を慕恨せざる、左ればこの短かき時限、そは直ちに過き去るべき此の短き時限の快樂と、敢て妄用するの恐れなき此の尊き幸とを受るの樂と何故にこの罪なき幼き兒に與へざる乎、一と度び去て亦歸らざる、かく迅速に過ぎ行くべき初年代を、何故苦痛と悲哀とにて滿さしめんとする乎、多くの人の子の父よ、諸君は其子の上に待てる死の近きとを知り玉はざる乎、自然が之に與へたる幸福を其愛子より奪ふとを恐まざる乎、左れば彼の幼兒をして世に生存するの快樂を感ぜしむるとを得るの時代とならば則ち直ちにこの快樂を感ぜしむるやふにすべし、何如なる時、神之を招きて眠らしむるとも、其以前すでに生存の康樂快味を感ぜしむべし、

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

未だ此感なくして早く死せしむることある可らずと。

（十一、）智育の無効

十二才に至る迄では、智育を與ふるは無用なり、之に歴史を教ゆとも無効なり、外國語を教ゆとも自國語と區別して明白に之を記憶することなかるべし、文學を教ゆとも味あはざるべし、一冊の書と云へども之に與ふ可らず、とは云ふ。云く、十二才に至る迄は、書物と小供談と云へども之に與ふ可らず、ラ、フォンテンの何如なるものなりや、をも知らずして可なりと。后に、實物教育（オブゼクト、レッソン）と云ひ、又は直覺教育（インチュイチーブ、メソード）と云ふものは、既に、「エミール」の中にあり、眞理の種既にこゝに萌す、たゞ之を述ることの極めて度に過たるの恐ひあるのみ。

（十二、）以上第一、第二卷に記したる、エミールは第三卷に入りて十二才以后十五才に至る、この間は即ち智育上の開發の時代なり、過十二年間自然のまゝに發育したる暴寛見は、以后三年間の智育によりて磨かるべきなり、三年の間甚だ短し、故に尤も用慎して尤巧みに教へざる可らず、而して、エミールも亦た此の教育を受るに堪ゆるものとなれりとぞ。斯てこの三年間の教育法として記載したるものゝ中に就き、其尤も注意すべきものを左に摘示すべし、

（十三、）教科を撰定すべし、

この短き年代間に教ゆべき學科は尤も愼密に撰取せざる可らずとて、エミールの爲に撰みたるものは即はち皆な實用的なり、云く、この時に適し且つこの用に應ず可き學科を撰まざる可らず、通常學科と稱するものに或ものは僞なり或ものは無用なり更に或るものは只だ虚榮の爲なり如此き學科は賢き人の注意採用すべきものにあらず。たゞ人世の實益となるべきものを撰むべし、即はち斯るものゝみを子弟に教ゆ可し。何ものをゝ知らんとすることを旨とせず、尤も益ある者を學ぶことを主意とすべし、(It is not a question of knowing what is, but only what is useful)

これ、スペンサーが如何なる智識が尤も價あると論じたるものゝ主旨と同じ。全く實利的の論旨なり。蓋し無用なるものは學ぶべきに非ず、左れば何如なるものが實用なる、これ問題のかゝる所なり。たゞ日常平易のとの爲にのみ着目し、衣食生存するの爲にのみ實用を旨とせば、人生最高の目的に對して人は最早死せるに均し、故に有益と云ふことを旨とするは可なり、たゞ有益とは何如なることぞやと反問せざる可らず。左れど、ルッソゥの實益とは實利論者の言ふ所に同じ、如此實利主義の教育は、人の眞の教育の只一部分をのみ言ふなり。未だ全部を知る者に非ず。然れども、學科は固より撰まざる可らず、何ものをも悉とく教ゆべきに非ず、スペンサーが所以は、益に立つと云ふの廉にて、すべてを學ぶ可らず、尤も多く益に立つものは何ぞと云ひて學ばざる可らず。然るに實際教育上度々この誤に陷ひるものあり、一種の教育者は何ものをも其の子弟に教へんとはするなり。アッベ、ヂウ、セント、ピーレの如き即はちこの類なり、彼は學校にて万事を教へんとす、七八才の頃ろ少しく醫術を教へ、其后、數學、畫紋術、法學、獨逸語、伊太利語、踏舞、朗讀、政治學、倫理學、天文學、解剖學、化學、其他二十余の學科を悉とく教へんとしたり、如此きは固より失策なり。學科は固より撰まざる可らず、たゝ實用の主旨を狹くし、人を利益卑近の爲のみの動物と爲す可らざるなり。

（十四、）エミールの學科

エミールに敎へたる學科は第一に諸の理學なり而して理學の中に於ては天文學を第一とし次に地理學を置けり、地理學を教ゆるには地圖を用ひず實際に旅行せしむるの方を用ひぬ。云く、汝は何故に球、圓、地圖の如きものを用ひんとする乎、これ何如なる器械ぞ、何の故にかゝる代用物を用ゆる乎、須からく第一に之に實物を示すべしと。而して只だ智識の多きことを貪ぼり其の實用と修練とに着意せざるの愚を非りて曰く、彼の智識に熱募し其網に眩せられ何處に止まるべきやを知らずして一より他へと走り行く人を見れば、余は宛から海濱にありて貝を拾ひ前途にある美しきを見て手元にあるを放擲し、たゞ前にくと眩して進み遂に何れを撰むべきやに惑ひ何をも得ず空手にして家に歸る幼兒の如しとは思ふ也と。此故に、エミールの學科には無用の多くの科を用ひずと云へり、即はち文典及び古典を廢し又歴史をも廢せり。蓋し歴史を教ゆるは人を社會に復するものにて、人を不完全なる社會に入ることを教ゆるは、好ましからずと思惟せるが故なり。如此き撰定法は矯激にして確かに其正當を失へり左れど其中ち亦た多少の眞理なきにあらず、之を參考とせば一助なきにあらず。

（十五、）教科書を用ひざる事

自然によりて教育せんとす、故に教科書を用ふるを甚はだ不可なりとせり、之を

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

文學界

一月廿五日發行

第壹號要目

琵琶法師（悲曲）　古藤庵

吉田兼好　禿木子

阿佛尼　天知子

文章道　巖本善治

富嶽の詩神を想ふ　北村透谷

漫詩　古藤庵

（附錄）女歌仙家集講義　大和田建樹

兼好法師家集

阿佛乳母の文

	府	外
一冊	六錢	六錢五厘
六冊	卅三錢	三十六錢
十二冊	六十錢	六十六錢

東京下六番町

女學雜誌社

新年の贈物

は面白き勸懲繪草紙にして第一小供にも分り易く大人にも敎へとなるべき意味ある書物なれば土産遺物としては無類のものに候

定價一冊五錢

郵送料二錢

鈴木弘恭大人著

再版 増補

文法口授

一名和文獨案内

（半紙判日本綴）

特別賣價　金拾二錢　郵便税　金二錢

目錄

（一）文と云ものヽ譯

（二）章句段節の譯

（三）文を作るは容易なる譯

（四）多く文を作るを善とする譯

（五）文を作る工夫の事

（六）草稿の譯弁に書方

（七）文を練磨する事

（八）文を作るに病癖ある事

（九）佳篇を作る法

（十）文を培養する法

（十一）種々の文例

東京下六番町

女學雜誌社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

赤峰瀬一郎主筆

新文學

定價六錢

明治廿六年二月一日第壹號發兌
東京市神田區一ツ橋通十六番地
新文學社

目次

主旨
新文學誕生日の宣言書
新文學の領分

祝詞
書翰　文學博士　加藤弘之
同　文學博士　外山正一
祝文　從三位子爵　長岡護美

論説
楠正成論
古文評論　第一高等中學校教授　小中村義象

文苑
天海大僧正二百五十年遠忌追弔の歌並序。鍋島侯爵の新築落成の祝に催されたる歌會の日新室賀てふ題にて人々の讀まれたる歌數首。本居豐穎君數人の首。越後の奇僧良寛の歌數首。竹添前辨理公使外數人の詩。

傳記
釋迦如來一代記
僧玄道傳　文學博士　島田重禮

批評
百人一首註解に就て　批評散人

雜錄
。おとみいひね。といふ差別　從五位　鈴木重嶺
大和歌の功能男女の平和

註解
源氏物語註解　高等女子師範學校講師　本居豐穎
百人一首註解附畫像二個

對譯
譯常山紀談　東京尋常中學校講師　岡松甕石
論語孟子英譯
英書翰二通和譯　ドクトル、レッジ

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

皇后陛下
明宮殿下
御覽濟の書

巖本善治妻 譯

(リツトルロード、フオンルトロイ)

小公子

小供のよみ本

再版
賣捌所

森田思軒居士の批評

余紛々たる世間の譯文に於て平生甚だ許可少なし獨り若松賤子の「小公子」に驚嘆す今「罪と罰」を得て又之を二にせむとす二書が皆な其文を俗話躰に取りしは極て智なり苟も俗話を以て文となせば其詞を採り其の方式を求むるの廣くして且つ便なる車夫厨婢の偶語も直ちに我が文の資とならざる無し若し專ら雅言を用ひば「小公子」のフオントルロイが始て老侯爵に謁する處本書の醉漢が醉言する處の如き余は恐る縱ひ賤子不知庵が如意の筆を以てするも寫して今の文の半ばにも至るを得ること能はざるを余は是に於て益々世間の譯者の弱處が其詞に貧なるの一事に根する者多きを知る。

定價金三拾八錢の所今回**新年**の贈物として**特別金廿八錢**(郵税金八錢)に引下候間續々購求被下度候

東京◉東海堂、巖々堂、東京堂、武藏屋、警醒社、京都◉便利堂、東枝律、大坂◉岡島、梅原、神戸◉福音社、熊本◉草野、函館◉福音舍

九州文學

一月三十日發兌

●新年撰頭の九州文學は更に一層の光彩を放ち潑々たる大精神を奮ひ躍然として文壇に現れ出んとす

●卷首には我が日本基督敎に大功あるキヤプテン、エル、エル、ヂエニス氏の鮮明精細なる肖像を掲げ人をして其の英風を懷はしむ

●本號中の重なる文字は「社説」に出師の表を讀むなる眞摯正大なる文字ありヂエンス氏及び熊本バンドなる俯仰感慨先人を懷ふの雄篇あり「論説」には尊王論を收め「文藻」にはバイロンの傑作たるちろん城の四人なる長歌あり「講演」には絶對論あり其他の諸篇皆な高山大河の概あり

●大附錄には舊熊本洋學校の顚末を詳記しヂエンス氏の性行及び花岡山獻身の終始を敍し紙數二十頁餘歷々として當年の狀目に見るが如くならしむ

●卷尾に舊洋學校生たりし山岸弘道君、森田九万人君、海老名彈正君、不破唯二郎君、藏亦惟郭君及び同志社なるデビス君の寄稿に係る雄篇を掲載したり

我が基督敎の信徒諸君は勿論當世に志ある諸君は須らく混々流れ來れる九州の活泉を一掬せよ

定價 一冊 前金五錢 十冊 前金四十五錢 ── 地方 一冊 前金五錢五厘 十冊 前金五拾錢

廣告料 二十四字詰一行五錢二拾行以上四錢五厘

發行所 熊本縣薩摩郡大江村熊本美學校内 九州文學社

哲學雜誌

◎論說●形式的論理學の三段論法因明の三支作法並彌兒の歸納則を論ず(第三)文學士大西祝●英國新カント學派に就て(承前)ドクトル中島力造◎史傳●**詩伯「テニソン」**(承前)文科大學敎師ドクトル**ウード**●「ソクラテス」前の希臘哲學(第七回)文學士大西祝◎批評●我觀小景を讀む文學博士元良勇次郎◎解題●易經故紅葉山文庫奉行近藤守重◎雜錄●「ブラジル」の詩人「ルナン」の小話●學問上國民の特質●腦髓細胞の運動に就いて(承前)醫學士吳秀三◎雜報●「スペンサー」氏倫理學原理第一の卷發兌●「ヘルバルト」の敎育學是より英國に入らん◎學會◎新著

●第七十一號一月十日出版
●本誌定價一冊郵税共十錢
六冊前金郵税共五十七錢
●發行所　東京本郷六丁目　哲學雜誌社

鈴木弘恭大人講述　附錄小倉てびき

第四版 百人一首講義

正價金廿八錢　郵税四錢

御高評の**第四版**今や**賣切**れんとす今回又々**第五版**印刷中希**新歲贈物**に續々御購求あらんことを請ふ

女學雜誌社

護教社移轉廣告

今回京橋區竹川町九番地より左記の所へ移轉す以后通信注文其他一切の郵書等同所へ御發送被下度候

東京赤坂區仲の町二番地

山路彌吉方

女學雜誌代價

○白赤双方合せ購讀の分

十冊	前金	五十八錢	府外	六拾三錢
廿六冊(半年)	同	一圓四十三錢	同	一圓五十六錢
五十二冊(一年)	同	二圓六十錢	同	二圓八十六錢

○白赤の内一方購讀の分

六冊	前金	三十五錢	府外	三十八錢
十三冊(半年)	同	七十三錢	同	七十八錢
廿六冊(一年)	同	一圓三十錢	同	一圓四十三錢

一冊金六錢　郵税金五厘

廣告料及無料廣告

一行(廿七字詰)	一回	前金	拾錢
同	三回以上	一	割引
同	六回以上	二	割引

○十行以上一割引。　二十行以上二割引。
○四十行同四割引。
但し不道德なる廣告は謝絶す、慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く
○特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部注文を要し以上半頁每に十部增さ定む。

發行所

東京市麴町區下六番町六番地

女學雜誌社

編輯兼發行人　巖本善治
印刷人　堀口庄三